

かくして會社へ歸ると、すぐに田舎の母へ有りの儘の事情を告げて、相談の手紙を出しました、

## 親心

明からの手紙を見ると、すぐに智恵子は上京して参りました。

そして明に逢つて、委しい事情を聞くと、すぐに二番町の宗方家を訪問して、主人夫妻に面會して、總ての事情を聞取りました。

それは總て明の話した事と、寸分違はないのみでなく、宗方夫婦が明の全人格を信じて、我が子の家庭教師として、雇ひ入れ度き純眞な熱望を持つてゐる事と、外に明が無理な夜間労働のために、大切な勉強時間を奪はれ又そのために健康を害して、勉強半ばに倒れては、折角の人材を惜しむといふ、大きな義侠心も含まれてゐる事を、

聰明な智恵子は見取つたので、その好意を深く感謝し、嬉しさの餘り、自分達の境遇の生ひ立ち等について、偽りなく打開けました。

しかし乍ら夫の名譽を思ひ、藤村敏郎の名前だけは口に出しませんでした。

智恵子は總ての事に對し、深く感謝し、尙親として明の身の事につき、吳々宗方氏夫妻に依頼して、宿へ歸ると、明に向つて、

「明、お前に聞いた時は、餘り話が結構づくめだから、お前が間違つた事を言ふとは思はなかつたけれど、萬一お前が信じてゐる事と、後で違ふ様な事があると、折角の信念に傷がつくからと思つて、私が伺つて、宗方様の御主人御夫婦に總ての事をお尋ねして來ましたが、お目にかゝつて見ると、お前に聞いたより、私が想像したよりも、すつとすつかりした御人格の方なので吃驚しました。

そして不思議な因縁で、お前の自動車に、御主人が少しの間お乗り下さつた事に依つて、お忘になつた靴をお届け申した事は當然だけれど、その前後のお前の處置態度が非常に御主人のお氣に召して、是非お子達の家庭教師として、雇はれて欲しいと



のお言葉だつたが、別にそれとはお口にお出しにならないけれど、お前は勉強中の大切な體だから、勤勞のために時間を冗にするといふ事は、勉強の妨げにもなり、健康を害して途中で倒れては、折角これ迄私達親子が盡して來た苦心努力も水の泡だ。と非常に御同情下さつて、お子様方の學習のお相手といふ事を口實として、お前の學業を大成させやうといふ、大きな慈悲心をお持ち下さつて、他に餘り例のない程のお手當も喜んで出して下さると仰有るのですよ。

私はそれを伺つて、夢ではないかと、自分の心を疑つたほごでした。

實は明、こんな結構なお話が出来たから、私はお前に打明けますけれど、實はお祖母さんが昨年秋から、老衰病で寝んで見えるんですよ。」

明は驚いて、

「えゝ？ お祖母さんが悪いんですか。」

何故僕に知らせて下さらなかつたのですか。そんな事なら……。」

「お祖母さんが、明に知らせると、又心配して勉強に障るから、萬一の場合でなけれ

ば知らせて呉れるなど言はれるものだから、態と知らせずにゐたのですよ。」

「お母さん、お祖母さんは餘程悪いのですか。」

「大病といふ程じやないけれど、何處となく悪くて、今では寢てばかりゐらつしやるので、看護に手がかゝるため、私は餘り人様の仕事も充分出来ないで、収入も少ないのに、お祖母さんの御病氣で、何かと費用が多かゝるのです。」

私に取つては大切な、一人のお母さんで、永い間苦勞をかけたから、出来る限り懇ろに看護して上げ度いと思つて、一生懸命手を盡してゐるんだけど、さうすればする程収入がないので、お前の所へ月々上げた、貳拾圓のお金も、この頃では無理な賄をして、送つてゐました。

この先どうなるかと思ふと、本當に人知れず心配してゐました。

それにお前が、自分で學資を得るために、夜分自動車の運轉手として、激しい勞働をするといふ事は、三月や半年は無理に通せても、人間の體力には限りがあるから、それがために若し體が疲勞して、病氣にでもなつて倒れて終つたら、これ迄苦心した



のも水の泡と思ふと、私はじつとしてはゐられないので、お前が健康で無事に大學を卒業させて頂ける様に、昨年十月の初めから、毎朝未明に起きて、水垢離を取つて、氏神様に祈願をこめてゐました。

其處へ今度お前から、あんな知らせが来たので、眞偽を糺すために、上京したのですけれど、こんな思ひがけない事から、お前の學費を保證して、勉強を助けて下さるといふ方が現はれて下さるといふ事は、人間業ではない。

これこそ神様の御神徳の現はれでありますから、貴方もそのつもりで、宗方様の方へお世話になつたら、御神徳に報ゆる覺悟で、眞剣で宗方さんのお子様のお世話を申上げるのみでなく、貴方が御厄介になつてゐる事に依つて、宗方様のお宅のお徳になる様に努めて下さい。」

「お母さん、よく分りました。」

さういふ事情で、僕のために御苦勞してゐて下さるといふ事は知りませんでしたけれど、大學へ参りましたからは、参考書も澤山買はなければなりませんので、ごんな

に節約しても五六十圓の費用がかかるので、せめて學費の半分でも、自分で負擔する事が出来たらと思ひまして、夜間だけ自動車の運転手になつて、働く事にしました。

今三時間位働く時間があつたら、お母さんから御送金して頂かなくとも、自學自習が續けられると思ひまして、その事ばかり考へて、或時は夜明けまでぶつ通して働いた事もありました。

でもお蔭様で、今に一年になりますのに、風邪一つ引きませんでした。

今から思へばお母さんの御信念が神様に通じて、絶えず私の體を御守護して下さいたゝめと思ひますと敬虔な氣に打たれます。

當然の運命から申しますと、矢張り今迄の道を辿るより外に、方法はなかつたのであります。偶然にかうした結構なお話が出来て、宗方さんの方で、卒業迄御厄介になれると致しますと、私も落着いて、力限り勉強が出来ますし、遠つた意味で體も鍛へる事が出来ます。

そしてお母さんからも、御送金願はずに、お祖母さんを懇ろに、お世話して孝養を



盡して頂く事が出来ると思へば、何だか目に見えぬ大きな力が、私共の上に訪れて、加護して下さる様に信じられてなりません。

お母さん、僕は貴女が仰有る迄もなく、今日受けた御恩は、今日報ひる様に努めまして、決して卒業後迄大恩を受け残す様な、無責任な事は致しません。

必ずお母さんが仰有る様に、私の身が動く所に、必ず徳が集る様に、誓つて努力して、宗方様の御期待にも添ひ、御恩にも報ひますから、御安心下さい。」

とはつきり誓ひました。

智恵子は喜んで、

「それを聞いて、私も安心しました。」

お祖母さんにこの事をお話したら、どんなにお喜びになるか知れませんが、

と言つて喜んで、翌日明を宗方邸に送つて行つて、總ての事を懇切に頼んでおいて、癒て病む母の待つ我が家へ歸りました。

## 教への庭

富豪の家に生れ、金銭物品に何一つ不自由を知らず、盲目的な父母の愛の中に育つた子は、温室の華の様に意志の弱いもので、外から見ると、美しく伸びやかに見えても、一寸した外部の刺戟に觸れると、すぐに耐えられなくなつて、思想的に變化したり、體を害つたりして、父母に嘆きをかけ、世間から非難される事の多いものでございます。

宗方家には、今年明けて十八の中學四年の利男と女學校三年の美喜子と、小學校五年の義之があります。

何れも學校の成績は悪いといふ程ではないが、決して優秀ではありません。それがために癒ては高等學校へ行く利男、今年中學へ入る義之のために、両親は身



も細る思ひで、心配して居ります。

このためにこそ、明は家庭教師として、懇望されたのです。

明が、宗方家へ来た當時は、三人の子供達は、朝床を離れても、自分で床を上げません。全部女中に疊ませます。

そして洗面するにも、女中が暗い中に起きて、湯を沸して、一々丁寧にその由を告げると、熱いとかぬるいとか叱言を言ひ乍ら使ひます。

食事の時も必ず、定まつた様にお惣菜の叱言、御飯の叱言を言ふのが、決りの様になつてゐました。

その度に母の品子夫人は、子供達のよくない、我儘な習慣を矯正する事を忘れて、女中達に叱言を言ふのが常でした。

學校へ行くにも、着物迄炬燵で温めさせて着更へ、靴迄女中達に手傳はせて穿き、大騒ぎして出て行きます。

子供達を送り出した後では、三人の女中達がほつとした様な顔をしてゐます。

女中と書生の中井五郎、運轉手の三浦一夫は、朝から晩迄休みなく働いてゐますが、邸は大きく、用事は多いので、少しの休息する間もない様です。

それなのに召使達より、二時間も遅く床を出た子供達は、次から次へと女中達に用事を言ひつけ、餘分の事に時間を費させ乍ら、自分達は假りにも箒を取るなどいふ様な事は一度もありません。

そして學校から歸ると、お菓子だ果物だと、普通の食事以外に、濫りに食べるためか、始終胃腸が悪いとか、頭痛がするとか言つては、よく兩親に心配をかけます。

そして唯の一度も兩親の恩に感謝するとか、召使を憫れむとか、食物初め總ての物品を天恩物として、尊ぶといふ様な心持などは毛頭なく、唯父母の名譽地位に誇り、富豪の家に生れた子女である自分達を、特權者の様に感じて、品物を粗末にしたり、無意味な事に高價な品物を買つて、多額の費用を費す事を恥ぢないのみか、却つて得意にさへなつてゐるのでした。

明は宗方の家へ来て、十日位は總ての様子をじつと見てゐましたが、深く感ずる所



があつて、十日目の日から、朝は女中達と同じ時間で、まだ夜の明け切らぬ中に起きて、庭の井戸へ出て、素裸になつて、冷水摩擦をし、體操をすると、お勝手へ行つて女中達に手傳つて、水を汲んで與へたり、湯殿の掃除をして、新しい水を入れて、夕方沸かすばかりに世話をしたりしました。

そして庭の掃除を奇麗にして終ふと、門迄塵一つ残さぬ様に掃いて、水を打つて終ひました。

かうして下駄の鼻緒が切れてゐても、丁寧にすげ代へ、泥などがついてゐれば、奇麗に洗つて干しておくといふ工合に、家の内外の事に、細心の注意を拂つて、整理整頓し清淨にして、今迄とは見違へる様に手入れをしました。

遅く起き出て來た主人夫婦や子供達は、目を睜りました。そして

「貴方は、そんな事をなさらなくてもよろしいから、ゆつくり寢んで下さい。

そんな仕事は、女中達や中井や三浦が致しますから……。」

と品子夫人が言ひました。明は

「いゝえ、自分の務めですから、氣のついたゞけはやらせて頂きます。」  
と言つて止めません。

食事の時も明だけは、家族と一緒に済ます事になつてゐますが、明はきちんと静座すると、お膳に向つて暫く黙禱し、嚴肅に合掌してから箸を取り、食事の間は一言も語らず、箸や茶碗の音も立てず、落着いて靜かに食べて、比較的少食です。そして子供達が、

「先生、お汁が甘いでせう。」とか、

「先生、これ辛いでせう。」

など言つても、

「いゝえ、大變結構です。」

と言つて、一言半句も、食事について批評なぞ致しません。

朝床をきちんと上げて、四隅揃へて掃き清めた押入れに入れ、自分の座敷は、塵も止めてゐません。



机の上も本箱の中も、きちんと敷理されて、硯箱の置き方さえ、一分も斜になつてゐる様な事はありません。

着物も服も、いつもきちんとして自分で疊み、いつも折目正しい服を着てゐます。

靴なども、學校から歸ると、すぐに自分で奇麗に磨いておきますので、出かける時に、少しも面倒がありません。

若し主人の用事で、親戚その他へ行つた時などは、よくその性質と場合を考へ、相手が驚く程しつかりした態度で、圓滿に要件を果して歸ります。

若し買物に行つた場合は、品物をよく調べ、しつかりした高尚な爲のよい物を、しかも安價に買つて來ます。

又訪問者なごとき、主人に代つて應待する時は、來客に對しては情誼正しく懇ろなので、いつまでも好印象を残すのでした。

又主人の子供に對しては、

「かうする様に。」とか、あゝする様にとかいふ様に、指圖がましい事は言ひませんが、

與へられた復習豫習の時間には、極めて嚴肅に、親切丁寧に指導します。その間に折にふれては人間の眞の人格といふ事を、よく説きました。

そして天恩物の如何に尊いものであるかといふ事について、色々な實際教育に依つて、報恩感謝の、信仰的信念を植へつけて、百萬言の議論より、一つの實行の徳の尊さを教へました。

明治天皇の御製

よき事を聞くも學ぶも何かせん

身の行にせずば甲斐なし

傳へ來て國の寶となりけり

ひじりの御代のみことのりぶみ

の御心を例に引いて、教育の眞の價値と、誠の人格日本國民としての信仰的信念と、義勇奉公、敬神崇祖の本義を説いて、義勇奉公の特性を、深くその魂に教へ込んで參りますと、僅かの間に、子供達の奢侈贅澤、傲慢な行爲や態度や、朝寝間食その他の



悪習慣が、すつかり改つて、誰も教へないのに、三人の子供は、四月頃からは、明と競争の様に起きて、男の子は冷水摩擦をして、體を鍛え、美喜子は女中達を助けて、よくお勝手や掃除を手傳ひ、愉快に立ち働きますので、両親も此頃では早起きして、喜んで働く様になりました。

ために今迄は、御主人も子供達も、尊大ぶつて働かず、人を使ふ事に依つて尊く、召使は身分低き者と思ひ、これを使ひ得の様に考へてゐたのが、自我心の誤りであつたと氣付くと、初めて召使を慈しみの心持を以て、見又接し、食物等も主人と餘り區別せず、出来るだけ用事を少くして、お互に修養する時間を與へる様になりました。女中や書生運轉手達は、大變喜び、

「篠原さんがお出で下さつたお蔭で、お上の方々のお心持が、まるで變つて終つたので、お邸の様子が違つて終つて、まるで冷い冬から春を迎へた様に、温く住みよいお邸になりました。」

と言つて、いつも語り合つては、折さへあれば、明の人格を賞め、又感謝するのでした。

た。

三人の子供達も、いよく明が非凡な天才家で、人格者である事を知ると、心から尊敬して、明から學科の復習豫習をして貰ふといふのみでなく、その全人格を手本として學びますので、いつとなく體も丈夫になり、氣品も高くなつたばかりでなく、學業の成績も、驚く程向上しました。

利男も優秀な成績で、高等學校へ入學し、義之も目出度く尋常科を卒業、希望の中國學校へ入學する事が出来ました。

主人夫妻の喜びは、何に譬へようもなく、

「篠原先生のお蔭で、二人共優秀な成績で入學出来まして、こんな嬉しい事はありません。」

と、明を全く家の寶の様にして、信頼し敬愛して、どんな事でも相談する様になりました。



## 大和撫子

四月の初めになると、宗方家へ、品子夫人の従姉の娘である、照子といふ少女が参りました。

生れは埼玉で、數年前迄は兩親が揃つてゐて、父は中學の先生母は女子師範の家事の先生として、教育界に活躍してゐましたので、堅實で圓滿な幸福に満ちた家庭生活の中に、照子とその弟茂の成人を樂しんでゐましたが、三年前の夏父が腸チブスで縣病院に入院したので、母は看護に行つてゐましたが、病が重り遂に死亡すると、間もなく母も感染して、どつと寝込んで終ひました。

そして一ヶ月もたぬ中に、二人の愛兒を残して、この世を去つて終ひました。後に残された二人の孤兒は、兩親の残しておいた貯金や力に、今日迄田舎の叔母の

家で厄介になり、茂は中學へ、照子は女學校へ通つて居りました。

今年には照子が田舎の女學校を卒業するので、品子夫人の計らひで、宗方家へ引取り東京の女學校の五年へ入學させる事になりました。

そして卒業の上は、女一通りの道を學ばせ、然るべき所へ嫁がせるといふ條件で、上京したのでした。

明が初めて品子夫人に、照子を紹介され、

「篠原さん、これは埼玉の私の従姉の娘ですが、三年前に兩親を亡くしましたので、今迄弟と二人、田舎の叔母の家に厄介になつてゐましたが、今度女學校を卒業しましたので、こちらの學校の五年へ入れて頂き度いと思つてつれて参りましたの。」

これから宅から通學させますが、宅の子供同様に、御面倒を見てやつて下さる様にお願ひ致します。

照子、この方はうちの子供達の御面倒を見て頂くために、お願ひした、篠原先生です。お前も又御指導して頂いて、よく勉強するんですよ。



同じ女學校と言つても、田舎の女學校と東京の女學校とでは、程度が違ふから、う  
つかりしてゐると、ついて行かれない様な事になるかも知れませんかからね。」

照子は品子夫人から紹介されると、少し後へ退つて、靜かに手を突いて、  
「私照子と申します。」

「どうぞよろしくお願ひ致します。」

と挨拶しました。明も

「僕篠原明と申す者で、こちら様に御厄介になつて居りますが、今後どうかお心易く

お願ひ致します。」

と挨拶を返しました。そして照子が淑かに顔を上げた瞬間、

「何といふ明るい、朗らかな感じのする、そして女らしい優しい人だらう。」

と思ひ、又瞳の光りの清らかな事に感嘆しました。

照子は又明の、餘りにもがつしりとして、容貌風采の凛々しいのに、感じ威壓され

て、思はず俯向いて終ひました。

## 婦 徳 の 光

かうした初対面の印象が、將來二人をどんな因縁に結んで行くかといふ事について  
は、品子夫人は勿論本人同志も、想像さへする事は出来ませんでした。

始め照子がこの家へ来た時は、純眞な女學生姿でございました。明は  
「又一人教へ子が殖えた。」

といふ感じより外に、何もものもなかつたのでございます。

所が四五日たつと、明が吃驚する様な事が、次々に現はれて參りました。

この家の子供達と、同じ様にして、通學する筈であつた照子は、朝は女中達より早  
く起きてエプロン掛で、お勝手で働いてゐます。

子供達は明が來てから、食物の叱言は、何時の間にか言はなくなつたけれども、明



が味つても、

「今朝は少し味噌汁がからい。」

と思ふ事もあり、又

「今日は少しお汁が甘く、お惣菜の煮方も、もう少し何とか出来ないか。」

と思ふ事などが、始終ありました。

けれども照子が来てからは、全く味噌汁の味も、吸物の味も、お惣菜の味付けも御飯の炊き方もすつかり變つて、驚く程おいしくなりました。

一寸した残りのお野菜で、何かと思ふ様な目新しい、おいしい料理を食膳に上せますので、みんなが喜んで、

「何うしてこの頃はこんなに、お味噌汁もお吸物もおいしくなつたのでせう。」

「お惣菜のお味もとてもよくなつて、大變おいしいが、お味噌やお醤油が變つたのだらうか。」

と女中達に聞きました。すると、

「奥様それは照子様のお手際がよろしいからでございます。」

お味噌のすり方、煮出汁の取り方、お野菜やお魚の煮方など、すつかり教へて頂きますものでございますから、それでお味もよく出来る様になりましたのでございます。

御飯も以前よりすつとおいしく出来て居りませう。」

「さうですよ。御飯もとても此頃おいしいんですよ。私は又お米が變つたのかと思ひましたがでは照子がお前達に教へるの？」

「はい、教へても頂きますが、朝や晩は大抵照子様がお味加減をして下さいますので

.....

「まあ 照子は、そんなに上手にお料理が出来るの？」

「はい、随分お器用でわらつしやいます。」

お炊事だけでなく、お洗濯なども、それは一々早く、奇麗にお洗ひになりますので、どうしてそんなに早く御奇麗になりますのでせうかと、お尋ね致しますと、色々な洗ひ方を教へて下さいました。



奥様刷毛洗ひを致しますと、揉み洗ひを致しますより、奇麗に生地も傷めずしかも時間も早く、手際よく上るのでございますね。それも教へて頂きました。」

「さうなの？ そんな事もあの子は研究してゐるんだね、

大人しいばかりで、別に能はない様に見えるけれど……。」

「あら奥様、とてもお静かにしてゐらつしやいますけれど、とても活氣があつて、手早くはきくなすつて、又懇ろな方でございます。」

「そんなお忙しい時に、どんな事を伺ひましても、ちつとも悪い顔をなさらずいつでも御機嫌よく、御親切に細い事迄教へて下さいますの。」

「お野菜の葉など、一枚でも私共が捨てますと、勿體ないと仰有つて、御注意下さいます。」

昨日奥様や皆様に差上げて、賞めて頂きました、あの天婦羅は、照子様が市場で鰯を五錢お買ひになつて、それを細かく刻んで、搦鉢で擦りましたのを揚げましたのでございませう。

照子様はお料理の中で、これ位營養價が多くて、おいしい物はないと仰有いました。が、上等のお肉やお刺身を、何圓といふ程買つて参りまして差上げて、減多に賞めて頂けませんのに、昨日の鰯の天婦羅は、皆様に喜んで頂けましたので、私吃驚致しましたわ。」

「本當に昨日の天婦羅は、とてもおいしくて、みんな喜んで頂きましたが、材料は五錢の生鰯だつたの？」

「全く奥様、照子様はお臺所の事がお上手で、私共感心して終ひました。」

「今迄私共は、牛蒡でも大根でも蓮根でも、何でも皮を厚く剥いて捨て、終つて、お料理をするものだと思つて居りましたら、照子様はほんの土のついた薄皮だけお取に

なるだけで、全部お使ひになります。そして野菜物は、皮膚の方にとても體の力になる營養分が含まれてゐますのでございますつてね。」

私達は伺つて吃驚致しました。



果物でも皮と實の間に、素晴らしい營養分があるから、成るべく皮の儘食べた方がいいから、若し剥くなら極薄く剥いて、營養分を残す様につて、教へて頂きました。

それからお葱やお大根の葉なども、とても營養分が多いのですつてね。

だから照子様は、大概葉を残らず食べる様に教へて下さいます。

大根のお葉なんか、細かく四耗か五耗位に切つて、お鹽で揉んで頂きますと、とても美味しいのでございますよ。

照子様がお出でになりません中は、あの大きな座溜に、お野菜の皮や葉や、お魚の頭や色々なものを、一日に一杯づつも捨てましたけれど、照子様がお出で下さいましたからは、何も捨てませんので、却々溜りませんの。

女中達は三人口を揃へて、代るく照子を賞めるのでした。

司郎は感心して、

「品子、それ程照子が齊家の名人なら、それ位の腕前があるか、當分あの子にお勝手の賄をやらせて見たらごうだ。」

今迄大體それ位で、一ヶ月賄つてゐたんだい。」

「お客様があつて、お散財した様な時は、別ですけど、普通の時はガス電燈水道その他お勝手の費用全部で、三百圓位でございましたわ。」

「その標準があるなら、一つ先の事は言はないで、照子に委せて御覽。」

「ですけど、何と言つたつて、まだ子供でございますし、學校へ行つてゐるんでございませぬもの、

そんな負擔を負はせるのは、可愛さうでございませぬわ。」

「だつてお前、學校を休んで、お勝手をせよといふのではない。」

唯女中達の支配者、お勝手の監督といふ様な責任を持たせて、どんな風に切廻して行くか、やらせて見たらいいじやないか。」

「それもよろしいかも分りませぬわね。」

では學校から歸りましたら、何と申しますか、一度話して見ませう。」



## 總てを委されて

こんな噂を留守中にされてゐることも知らず、照子はいつもの時間に歸つて來ました。

「小父様、小母様。只今歸りました。」

「あゝ、お歸り、早かつたね。」

「あのね照子、今もお前の噂をしてゐたのですがね。」

「はあ、それはどんな事でございませうか。」

照子が笑つて尋ねると、

「お前は非常に料理と齊家の名人らしいから、當分の間、お勝手の賄を、お前に委せて、責任を持つて貰つて見やうか。つて、言つてゐたんだよ。」

「まあ、小父様、そんな事私にはとても出來ませんわ。」

何も分らないのでございませうもの。」

「ごうでもいゝから、責任だけ持つてやつて御覽。」

毎月三百圓づゝ經費をお前の方へ渡す事にしますから。」

「まあ、小母様、そんな事私に出來ませうか。」

「出來ても出來なくてもいゝから、やつて御覽。」

いゝ經驗になるでせうから……。」

「左様でございませうか。出來ませうか、不安でございませうが、では一生懸命でやらせて頂きます。」

照子は素直に引受けました。

照子がお勝手の賄を引受けてからは、新鮮で營養價の高い食物が食膳に上せられて、家内中を喜ばせました。

客のある時の、茶菓飲物等の味又體裁など、實に巧妙で、主人夫妻さへ驚く程でございませう。



「今迄は來客があつても、親戚の者が來ても、大袈裟に仕出し屋へ言ひ付けて取寄せ、驚く程の高價な代價を拂つて居りましたが、照子が來てからは一度もさうした事はなく、食膳が美しくて賑やかで、箸を取る者皆、

「まあおいしいお吸物!!」

「このお野菜とてもおいしいわね。」

なご、口を揃へて賞めるのでした。

この年は不思議に、誰も胃腸も患はず、その他の病氣もせず、みんな元氣で幸福に楽しい一年が暮れました。

あと二日でお正月といふ日、宗方家では随分各方面に多忙を極めました。漸く落着いて、珍らしく今夜は司郎も早く家に歸り、うち中の者が揃つて、楽しい食膳に向ひました。

その食後の談笑中に、照子は改つて、

「小母様、今晚今年中のお勝手の會計を御覽頂きませうか知ら?」

「さう。では見せて頂戴。」

「では持つて参りますから、御覽下さいませ。」

照子は會計簿と貯金の通帳を持つて参りました。

「小母様、月に依つて、多少の増減はございますが、これだけ繰越金が出来て居ります。」

と、合計八百十八圓預入の預金通帳を示しました。

品子は吃驚して、

「あらまあ、これだけお金が残つたの?」

「はい、経験がございませんで、まだ方々に冗がございませうか、これだけしか残つて居りません。」

「貴方御覽下さいませ。五月以來これだけ照子が残したのでございませうつて。」

司郎は手に取つて見て、

「これは驚いた。八百十八圓なんて、大した金じゃないか。」



電燈、瓦斯、薪炭、米代なども入つてゐるのだらう。」

「勿論全部含んで居りますわ。」

それに貴方、今迄はお客様があれば、すぐに仕出し屋から取りましたから、お勝手の賄の外に、五十圓六十圓と拂ひがありましたのに、照子に渡してから、皆うちで料理をしますので、一度も店から取つた事はありません。

それでゐてお客様には、いつも賞められますの。」

「全く驚いたよ。照子お前これだけの者にもおいしい物を食べさせ、食膳も賑やかにして、どうしてこんなに安く賄が出来るんだ。」

お前の秘訣を言つて御覧。」

照子は笑ひ乍ら、

「何も秘訣なんてございません。」

今迄私はこちらへ御厄介になりません前は、お野菜もお魚でも、御用聞きが伺つたり、又お電話でお取寄せになつたさうですけど、私は毎日市場迄、誰方かと一緒に

に買出しに参りますの。

そしてお野菜もお肉もお魚も、新しく生きて生きがよく、お安いの見つて買つて参りますので、こちらへ取寄せますよりも、品がよくて新しく、お値段がすつとお安いのでございます。

それに御飯でも、お水加減と火加減で、随分炊き殖えが致しますし、お味も違ひますの。

それに瓦斯なども一寸注意致しますと、餘程節約が出来ますわ。

お炭なども、竈の焚落しを消しておいて使ひますと、随分節約が出来ますし、電気でも使ひ様に依りましたして、随分冗が省けまして、今迄の半分程ですみました事もありまして、會社の方から、何うしてこんなに少くなつたのかと言はれた事もございます。

電燈の節約は一番影響が大きい様でございます。」

「そして五十八圓といふ別なお金は、これは何だね。」



「これはお納屋の方に、捨てられてございました、お役に立たない古い御道具類や、空瓶や古雑誌などを毎月拂はないで、整理しておきまして、この間屑問屋さんに来て頂いて、買って頂きましたら、全部で五十八圓頂けました。」

「屑物の拂ひで五十八圓なんて、大變な事じゃないか。」

「でも小父様、ビールやサイダー瓶だけでも、大きな車に一杯ございましたの。」

私随分吟味して、まだお役に立つと思ふものは、一品も賣りませんで、よく撰り分けまして、屑屋に賣れば、又形を變へて世の中へ出で、お役に立つと思ふ物だけ賣りました。」

司郎は心から感心して、

「全く照子は齊家の名人だ。お母様が家事の先生だっただけあるよ。」

品子夫人は笑つて、

「全くでございますわ。私などいゝ年をしても、考へる事もする事も、照子の足許へも寄れませんわ。」

「あはゝゝゝ。大いに照子を先生として、齊家の道を學ぶんだね。」

美喜子もお勝手によく働く様になつたが、これも照子のお蔭だ。

「ごうだ、照子のお蔭でこれだけお金を残したんだから、これは照子の貯金にしてやる事にしたら。」

「貴方がさう仰有つて下されば、そんな結構な事はございせんわ。」

照子、これだけは小父様が、御褒美にお前に下さるつて仰有るんですが……。」

## 直 き 心

それを聞くと照子は静かに、しかもはつきりと、

「まあ小母様、そんなお金は私絶対に頂きませんわ。」

「どうしてなの？」



「でも小母様、頂く理由がございませんもの。」

「このお金はお宅のお金でございますから……。」

「だつて外の者がお勝手をすれば、全部使つて終つて、尙ほだけか不足するんですよ。」

「だから残つた分は、お前の力だから、お前の褒美に上げたつて差支へないんだから、頂いておきなさい。」

「いゝえ、そればかりは出来ません。」

「若しそんなにして頂くと、私これから先續けてやらせて頂く事が出来ませんので。」

「何故？」

「でも小母様、何の氣もなくやつてゐます時でも、お金を残して自分に頂かうと思つてあんなにするのだと思はれはしないかと、氣が退けまして、今迄の様に純真な明るい氣持では出来なくなりますもの。」

これ迄黙つてこの話を聞いてゐた明は感心して、

「全くさうです。照子さんの仰有るのは尤もな事だと思ひます。」

「司郎は笑つて、

「實に照子はえらい。」

では品子、お前預かつてお置き。」

話はこれで終りました。

明は自分の部屋へ歸つて、机に向つても、今の出来事が頭に残つて、すぐに本を開く氣にはなれませんでした。

「照子さんの様な人が、本當の典型的の日本婦人といふのだらう。」

「珍らしい人だ。あの人は萬人に優れてゐる。」

女學生としての龜鑑たるべき人だ。」

「何といふ純真な温い明るい、その上真心の籠つた女性だらう。」

あの人が始終自分の部屋に自分の両親の御靈と額を祀つていつも美しい花を供へて生きた父母に仕へる如く、朝夕禮拜してゐる心持の純真さ美しさ。」



天恩物を絶對に尊ぶ報恩感謝の念の徹底してゐる事はどうだらう。ついぞ一度も淋しい顔不満な顔を見せた事なく、いつもにこくとして感謝に満ちてゐる。

兩親のない孤兒とはどうしても思はれない。

あゝいふのが、萬人に優れた心の美人といふのだらう。」

と泌々考へるのでした。

## 箱根の禍

正月休みを利用して、三人の兄弟が、箱根の宮ノ下の別荘へ遊びに行き度いと言ひ出したので、兩親も明も一緒に出掛けて参りました。

元氣潑刺たる三人は、ちつと温泉などに浸つて、平凡に過す事を好まないで、蘆ノ湖へ行き度いと言ひました。

大雪の降つた後で道も悪く、坂道は危険だからと、兩親も明も止めましたが、三人は肯かず、

「大丈夫ですよ。危険なんて事ありませんよ。」

と利男が言へば、義之も

「兄さん、大丈夫だね。蘆ノ湖へ行くのが楽しみだつたんだもの。」

「私も行くわ、とても素適だね。雪の蘆ノ湖なんて……。」

と頻りに焦り立ちますので、明も

「氣をつけて参れば大丈夫でせう。では僕も一緒に参りますから……。」

とタクシーを呼んで、四人は出かけました。

湖畔で暫く遊び、ホテルで晝食をしてゐると、又天氣が曇つて来て、雪がチラ／＼と降り出しました。

明は吃驚して、

「若しかひごく降り出すと、歸りが困りますから、もう歸りませう。」



と夕方迄遊ぶといふ三人を促して歸途に着きました。

峠を越へて坂道を下るのには、可なり危険な凍道ですから、明は

「君道が凍つてゐるから、よく注意して呉れ給へ。」

と言ひました。運轉手は

「よく注意してゐます。」

とは答へましたが、餘り雪が勢よく降り出したので、何處が道なのか先の見透しもつかなくなりなりましたので、運轉手も餘程苦心してゐるらしくは見えますが、明は心得があるもので、一層氣を揉んで何とかして無事に別荘迄歸りつける様にと祈つてゐました。所が小誦谷の傍迄来て、カーブへ差かゝつた時、輪がこつて、自動車はあつといふ間もなく、物凄い勢で數十丈の谷へ轉落して終ひました。

大勢の人が駆けつけて、救ひ出した時は、四人共人事不省に陥つてゐましたが、不思議に皆怪我は急所を外れてゐたため、命に別條はありません。

殊に利男、美喜子、義之の三人は、足手肩などに、微傷を負ひましたが、顔及び胸

には、大した傷も受けて居りません。

運轉手は頭に可なりひどく裂傷を受け、足にも怪我しましたが、之も大した事はなく、一番ひどかつたのは明で、右の肩と左の腰を石に打ちつけましたために、ひどい出血で、非常に貧血して終ひました。

大騒ぎをして、應急手当を施し、漸く小田原病院へ入院したのは、日がとつぶり暮れてからの事でした。

宗方氏夫妻の驚きは、一通りではありません。

しかし五人とも命に別條はないだらうと聞かされて、やつと安堵の胸を撫で下しました。

四人の怪我をした個所には、夫々完全な治療を施し、静かにベッドの上に寝させる、幾分心持が落ち着きました。三人の我が子の思はぬ過ちよりも、明に重傷をさせたとはいふ事は、何としても取返しつかない事をしたと後悔し、夫妻はその責任を痛感して憂慮に堪えませんでした。



明の治療が済んだ時、院長が

「餘り出血が多かつたため、非常に貧血して居られますが、暫く経過を拜見してから處置させよう。」

と言ひました。夫妻は三人の子供と明の事運轉手の事も、充分手當しなければなりませんので、看護婦を數名頼み、懇ろに看護に當らせる事にしましたが、自分達の心を心として、手足の様に動いて呉れる人が、この際は非必要だったので、東京の邸へ電話をかけて、照子を呼びました。

照子は電話口へ出て、思ひがけない出来事を聞くと、

「まあ、大變でございますわね。」

と言つたまゝ、後の言葉が出ませんでした。品子夫人は

「だからすぐこちらへ来て下さい。小田原病院ですよ。」

と言つて電話を切りました。

## 眞心こめて

その夜十一時過ぎた頃、照子は息を喘ませて、病院へ駆けつけて参りました。そして三人の兄弟の病室を訪れ、

「まあ、何てお悪い事でございましたでせう。」

「これが本當の災難といふんだよ。」

と司郎が言ふと、

「でも お命に別條がなくて、何よりでございました。」

お医者様は何の仰有いますの。」

「三人の方は二週間も経てば、全快するだらうつて仰有るんだよ。」

あれだけの所から落ちたのに、割合に怪我が少ないんだ。



これだけは不幸中の幸つていふんだらうね。」

「それは何よりでございます。」

「所が篠原さんが、ひどい怪我をしたので、困つてゐるんだよ。」

照子の顔はさつと變りました。

「先生が御重態ですの？ 餘程おひごかつたのでございますか。」

「何しろ肩と腰を、ひどく岩に打ちつけて、骨膜に達する程の裂傷をされたので、とても出血がひどくて、貧血して終はれたのだよ。」

院長さんも、餘程重態だから、看護に最善の努力を盡さなくてはいけないと仰有るけれど、突然だから、経験のある、よい看護婦がないので困つてゐるんだ。」

「さうでございますか。では私、経験がございませんので、お間には合ひますまいけれど、看護婦さんと協力して、一生懸命看護させて頂きますわ。」

品子は喜んで、

「お前が附切つて、看護して上げて呉れるなら、そんな安心な事はないけれど……。」

お前も學校があるんだから……。」

「でも小母様、こんな時に自分の學校の事など思つてゐられませんわ。」

皆様が御全快になつて、學校へお出になれます迄、私も休んでお世話させて頂きますわ。」

「さうか。お前に迄禍を及ぼしては氣の毒だが、かういふ際だから、手傳つて呉れるか。」

「小父様、勿論でございますわ。」

私の身で出来ませぬ事なら、どんな事だつて、身に及ぶだけ盡させて頂きます。」と誓つて、明の病室へ參りました。

明は大手術がすんだ後で、魔睡薬が醒めないためか、仰向けにすやくと眠つてゐますが、その顔は驚く程蒼ざめて貧血してゐます。

照子は驚いて、

「まあ、大變にお顔色がお悪いこと。大丈夫か知ら？」



と吐き乍ら、

「先生、先生。」

と呼んで見ましたが、返事はなく、依然として昏々と眠つてゐます。

「まあ、こんな御様子でゐらしていいのかわらぬか？」

と、ちつと目に涙を一杯ためて、その顔を見つめてゐますと、看護婦を従へて、院長が経過を見に來られました。

照子は静かに、

「先生、恐れ入ります。」

と挨拶しました。院長はにつこりして、

「やあ、貴女は、お身内の方ですか。」

「はい、左様でございます。」

院長は頷き乍ら、明の容態を診察して終ふと、

「何分出血が多かつたので貧血して、衰弱して終はれました。」

この患者さんには、輸血するのが一番いい方法ですが……。」

と吐かれました。照子はそれを聞くと、院長の顔を見上げ

「あの、私では合ひませんでございませうか。」

「貴女血液を提供してもいいのですか。」

「私のでお間に合ひましたら、喜んで輸血して頂きます。」

「それでは一應血液の型を調べさせて頂いておきますから、一寸あちら迄お出でになつて下さいませんか。」

「はい、畏りました。」

照子は醫務室へ行つて、血液の型を調べて貰ふと、丁度明のと同型でしたので、

「これなら結構です。では後刻輸血しますから……。」

照子は喜んで病室へ歸りました。

その夜は院長もまんじりともせず、幾度か注射して體を弱らせない様に手當を盡されました。



しかしまだ明は覺醒しないで、すやくと眠つてゐます。  
看護の人々は氣か氣ではありません。

萬一の場合を想像すると、宗方夫妻は、明を邸へ頼んだ動機と、明の身の上を知つてゐるので、責任を一層強く感じ、思はず吐息を洩らしました。  
朝になると八時頃、智恵子は慌だしく駆けつけて参りました。

### 母性愛

だが流石に聰明な女性だけに、不安が胸に一杯迫つてゐ乍ら、直ちに我が子の枕邊へは駆け寄らないで、靜かに周圍を見廻し事情を聞いて、宗方夫妻や照子や看護婦又居合せた人々に向つて、一々丁寧挨拶し

「この度は明が大變な粗忽を致しまして、皆様に御心配をかけまして、申譯もござい

ません。」

とお禮の言葉を述べておいて、明の病室を訪れました。

見ると健康な時には、血色よくでつぶりとした頬も、今は見る影もなく瘦せて、顔色は蒼ざめて、見る影もありません。

まるで生きた人とも思はれない様な様子で、靜かにくゝ眠つてゐます。

智恵子は千仞の崖から突落された様な感じがして、全身にぞつと悪感をさえ感じました。

泣くにも泣かれない、血を吐く思ひこいふのは、全く智恵子のこの時の心持であつたでございませう。

「明！ 明！ 私が來ましたよ。お母さんが來たのが分りませんか。」

有りつ丈の母性愛の籠つた聲を聞くと、見てゐる人は、思はず胸がすきくと痛む様に感じました。

だが明は何とも答へません。



依然としてすやく眠つてゐます。

「明！ 明！ しつかりしてお呉れ。」

と叫ぶと、しつかり明の手を掴んでゐた智恵子の目からは、ハラ／＼と熱涙がこぼれました。

この時誰かゞ、感極つて嗚咽する聲が聞えました。

それは後から、そつと覗いてゐた照子でした。

智恵子ははつと氣付くと、袂からハンカチを出して、目に當て乍ら、

「御免下さいませ。涙をこぼしたりして、失禮致しました。」

と無理につこりと笑つて、淺間しい自分の態度を詫びて、恥ぢる様に申しました。

その時院長がやつて参りました。

みんな丁寧にお辭儀をすると、院長は落着いた態度で、

「どんな様子ですか。」

と直ちに脈を取つて見、丁寧に診察し終ると、

「矢張り輸血しなくちやなりません。

貴女、少し血液を提供して頂きませう。」

院長が突然さう言つたので、みんなが吃驚しましたが、照子はいそ／＼として、

「あの、只今でございませうか。」

「早い方がいゝんです。」

「ではお願い致します。」

照子は、周囲の人が驚いて、目を睜つてゐる間に、忽ち用意は調へられて、輸血は始められました。

照子のふくよかな腕の静脈からは、赤黒い血が段々と明の腕へ送られて行きます。

心なしか明の顔には、血の色が射し初めた様です。

聴て輸血は終りました。院長は

「貴女は今日と明日位、静かに休んでゐて下さい。

そして出来るだけ營養になる食物を攝つて下さい。さうすれば二三日で元の状態に



かへられますから……。」

と照子に注意し、明の事も

「この分なら、屹度よい経過を辿られませう。」

と言つて、静かに出て行きました。

院長が去つて行くに、智恵子は照子の手を取つて、

「貴女 有りがたうございました。」

よく大事な血液を、明のために分けてやつて下さいました。」

と真心から深く感謝しました。

「奥様、これ位の事が、お役に立つなら、何よりお易い事でございます。」

何度でも命のある限り、取つて頂きます。」

「有りがたうございます。」

肉身の親兄弟でもない貴女が、よくまあさうしてお助け下さいました。

一生親子の者が恩に被ります。」

智恵子はさう言ふと、又も熱い涙を拭ひました。

みんなが照子の真心からの處置に深く感じ、明によい徴候の現はれる事を念じつゝ、

静かに部屋を去りました。

後には智恵子と看護婦が、水も洩らさぬ程に、細心の注意を拂つて、看護に當つて

ゐました。

その夜八時頃、智恵子が明の枕許に腰かけて、明の顔をじつと見凝めてゐますと、

明は夢から覺めた様に、ぱつちり目を開けて、

「お母さん!!」

と一言呼びました。智恵子は驚喜して、

「お、明、気がつきましたか。お母さんが分りますか。」

「分ります。でもこゝは何處ですか。」

「小田原の病院ですよ。」

明は邊りを見廻して、驚いた様に、



「病院ですか。では僕怪我したんですね。」

お母さん、三人の方に怪我はなかつたでせうか。」

覺醒した時の、最初の言葉は、三人の様子を氣遣つての間でした。

智恵子は聲を弾ませて喜び、

「明、心配しなくてもいゝんですよ。」

若様方やお嬢様は、ほんの僅かのお怪我で、二週間位たてば、完全にお治りになるさうですから、安心なさい。

お食事もよく召上るし、お話もお出来になりますよ。」

明はにつこり笑つて、

「さうですか。それはよかつた。」

お母さん、では運轉手は？」

「運轉手さんも、お怪我はされたのですけれど、矢張り大した事はなく、二週間位で完全に治るさうです。」

「それは有難いですね。」

お母さん、よく来て下さいました。御心配かけてすみませんでした。」

「いゝえ、大變だつたね。痛みはしませんか。」

今朝私が来た時は、貧血して終つて、お前は生きてゐる人だとは思はれない様な顔をして、昏々と眠つてゐるので、私はこのまゝで命が終るんじゃないかと、吃驚して終ひましたよ。」

「そんなに悪かつたんですか。」

自分では何處か、景色のいゝ所へ行つて、楽しく遊んでゐる様な、夢を見てゐたのですか……。」

「まあ 苦しくも何ともなかつたのですか。」

「ちつとも苦しくなんかありませんでした。」

何處か知ら美しい世界を遊び廻つてゐる様な氣持でした。」

智恵子はにつこり笑つて、



「お前がそんな氣持で眠つてゐたのだつたら、却つて愉快だつたでせうけれど、私は又、これつきりで命が終るんじゃないかと、氣が氣ではありませんでした。でもよく氣がついて呉れました。」

お前の命は、照子さんに救つて頂いたんですよ。」  
明はその言葉を聞き答めて、

「それは何の事ですか。」

「お前は知らないでせうけれど、傷から出血したので貧血して終つて、體が弱つたので、輸血しなければ、難かしい様に仰有つたものですから、照子さんがお前のために、血液を提供して下さつたので、お前は助かつたのでした。」

明はその言葉を聞くと吃驚して、

「あの 照子さんが？ さうでしたか。」

それはすみませんでしたね。僕らつとも知りませんでした。

照子さんは何處へ行かれましたか？」

「隣の部屋で休んで見えますよ。」

「あゝ、さうですか。照子さんは變つた事はありませんか。」

「二三回伺つて見たけれど、元氣で寝んで見えます。」

唯二三日少し營養分を攝る必要があると仰有つたけれど、病氣じゃないんだから、直きにお元氣におなりになりませう。」

「さうですか。」

お母さん、照子さんといふ人は、大變不幸な境遇で、両親共四年前に失つたため、宗方さんの所へ厄介になつて、學校へ通つて見えますけれど、近頃の若い女性には例のない程、真心の充實した、心持の優しい人です。」

「本當にさうですね。あんなに喜んで、大切な血液を、お前に輸血して下さる程の人だから、餘程真心の強い方に違ひありません。」

お前のためには、あの方は命の大恩人です。」

「さうです。全快したら出来るだけ、御恩返しをませう。」



と二人は泌々語り合ひました。

## 喜びの朝

明の病室の南の窓から、美しい陽光が射し込んで、清々しい朝でした。

智恵子は明にも朝食を侷め、自分もすまして、親子水入らずで、楽しく語らつてゐると、照子が美しい白梅を持って入つて來ました。

智恵子はそれを見ると、

「まあ、奇麗でございますこと。」

「奥様、奇麗でございます。」

先生、この梅をここに挿しておきませうね。とてもいゝ匂ひが致しますのよ。明はにつこり笑つて、

「有りがたう。よく匂ひますね。僕とても好きですよ。」

照子はそれを聞くと、嬉しさうに

「まあ さうでございましたか。それは丁度ようございましたわね。

先生、何處もお痛みになりませんか？」

「有りがたう お蔭ですつかり傷の痛みは止りました。

もう直きに起されれますよ。」

「本當に結構でしたわね。こんなに早くよくなつて頂いて……。」

「みんな貴女のお蔭ですよ。」

「本當ですよ。明は貴女に助けて頂いたのです。」

智恵子も心から喜んで言ふのでした。

照子も嬉し氣に顔を輝かして、

「私なんか、何のお役にも立ちませんけれど…… 先生の御運がよかつたのだ、お母様の御懇ろな御看護のお蔭でございますわ。」



「それこそ飛んでもない事でございます。」

みんな貴女のお蔭でございます。」

「全く今度の事は、何と言つてお禮申したらいいでせうか。」

大切な血液を分けて頂き、大事な学校も二十日餘りも休んで頂いて……。」

「本當に申譯もございませんわね。」

貴女に取つても、大切な御卒業の年ですのに。」

「私より先生の方が、お大切なのでございますわ。」

二月から卒業試験をお受けにならなければなりませんのに、こんな事で御勉強が

来なくて、ごうなるだらうかと、御心配申上げて居ります。」

明は笑つて、

「私の事なら御安心下さい。」

卒業試験さえ受ければ、成績は優秀でなくても、合格するだけの自信は持つてゐま

すから……。」

「普通の方ではないんだから、お大丈夫とは思ひますけれど……。」

ごうかして今月中に御退院が出来るとおよろしいと存じますわ。」

と照子は泌々言ふのでした。

照子は学校も、惜し氣なく休んで、明につき切つて、智恵子と協力して、全く文字

通り、夜も晝も寢食を忘れて看護に當りました。

この間に智恵子は、照子の世にも優れた心立人柄を、餘りに知り過ぎる程よく見ま

した。

「ごうして両親のない子に、こんな常識智能の充實したお嬢さんが出来たのだらう。」

と感心しますと、明は笑つて、

「両親の人格の感化でせう。殊にお母さんが、女高師出身の、家事科の先生で、却々

しつかりした賢夫人だつたさうです。」

だからその魂と訓育を受けてゐるので、あんなに圓滿な智徳が備つてゐるんでせう。」



智恵子は頷いて、

「あんな娘が自分の子であつたら、私はどんなに嬉しいでせう。」

それには明は何とも答へませんでした。

唯じつと目を据へて、深く何事かを考へてゐる様でした。

## 歐米崇拜者

明が全快して、東京の宗方家へ歸つて、三日後の事でした。

四年前友人と共に、アメリカのシカゴ大學で學んでゐた、宗方家の長女薫が卒業して歸朝しました。

そのためにうちは一層賑やかになりました。

だが薫はうちへ歸つて来る早々、食べる物に就ても、一つ／＼叱言を言つて、女中

達を困らせたり、用事を言ひつけて追ひ使つたりして、まるで女王様の様な態度で威張つてゐました。

する事と言へば火箸を取つて、火鉢の火を動かす位の事より外、何も致しません。

アメリカから持つて来た書物を、態々西洋間へ運ばせ、米國風に裝飾して、テーブルも椅子もその他カーテン迄米國式で、壁にかけた額迄も米國の山水でありました。

たま／＼手なぐさみに弾くピアノも、西洋の音楽、歌ふ歌も西洋の歌で、全く日本の國民、殊に婦人である事を忘れた様な娘でした。

朝から晩迄アメリカ好みの洋服で、靴の恰好も違つてゐます。

髪の毛も毎日と言ひ度い程慢をかけて縮らしたり、黒い髪をわざ／＼茶色に染めるといふ風で、僞装に並々ならぬ苦心してゐます。

化粧品なども、名も知れぬ物を數知れず持つてゐて、念入りにお化粧するのでしたが、その顔容は、まるで映畫俳優の扮装の様です。

ごちらから眺めても、尊敬すべき、日本娘といふ氣品は塵程もなく、さうかと言つ



て、純真な歐米の淑女には、遙かに遠い、實に變な曖昧なモダン娘です。

永い間その歸朝を樂んで待つてゐた、兩親も兄弟達も、餘りに變つた黨の風采と性格態度に驚き呆れ、時々衝突するのでした。

今迄は家内中が照子の料理に、舌鼓を打つて、口を揃へて賞めてゐたのに、黨は「こんな料理つてあるものですか。

まるつきり食べられやしません。」

と碌に箸もつけずに、すぐ叱言を言ひます。

それ位ですから、日本料理になると、尙喧しく言つて、おとなしく箸を執つた事はありません。

それでも照子は何も言はず、

「本當に行届きませんで、すみません。」

と詫びるのでした。黨は

「東京の女學校では今でも本當の西洋料理を教へる家事の先生がゐないの？」

「先生はよく教へて下さいますが、私が愚かでございますから、手際よく出来ないのでございます。本當にすみません。」

「今時の日本の女學生で、西洋料理がうまく出来なかつたり、英語の會話が出来ない様じや仕様がないわね。

うちへ來たつて、不自由で仕様がないわ。こんな疊の上へ坐つて御飯を食べるなんて、第一全く野暮よ。」

言ふ事が無遠慮で、二言目には、米國じやとか、あちらではとか言つて、餘りアメリカの事を言ふので、時々は聞き兼ねた父の司郎が、

「お前 僅か三年や四年アメリカへ行つて來たからと言つて、そんなに米國とかあちらとか、口に出すものじやない。

もどくお前は日本に生れた、日本の婦人なんだ。

強つて行き度いといふから、伴れがよかつたので、アメリカへ出して上げたけれど、アメリカへ行つて學んだ目的は、知識を廣く世界に求めて、外國のよい所を學んで歸



つて、一層博學多才な、堅實な日本婦人にし度い爲だつたのだ。  
 それをお前の様に、まるつきりアメリカの悪習にかぶれて終つて、女性として唾棄  
 し度い様な事ばかり日本へ逆輸入して呉れたのじや面白くない。  
 それだけじやない、大事な日本婦人としての、實を迄アメリカへ忘れて來て終つた  
 じやないか。」

「あら ババ それは何の事？」

「それが第一いけない。日本には昔から、お父様といふ、親しい言葉がある。  
 又お母様といふ懐しい言葉がある。

それを ババ ママ とは何の事だ。

お前はアメリカへ僅かばかり行つてゐたゝめに、アメリカかぶれして、アメリカが  
 世界一優秀な、文明國だと思つて、一生懸命でアメリカの悪習や弊風に馴れる事に努  
 力して、最も大切な進んだ知能を學んで歸る事を忘れて來たらう。

だから國へ歸つても、何も彼も舊弊で舊式で、野蠻な様に見えるんだらう。

そして食物も着物も建築も、その他總てがお前の目には、野蠻に見えるから、叱言  
 が言へるんだよ。

だがさういふお前の方が、人間が餘程愚かになつて來たんだよ。

言ひかへれば、野蠻になつて終つたんだよ。」

薫は鋭い目で父を睨んで、

「お父様、幾ら自分の子でも、レデイに向つて、そんな事は仰有らないものよ。  
 失禮じやありませんか。」

「何が失禮だ。親に向つて私はレデイだとは何だ。」

薫、よくお父さんの話を聞くが、

お前が四年位外國へ行つて、他愛もない夢を見てその悪風にかぶれてゐる間に、日  
 本の本國の國民の食物が、全部肉食つまり洋食に變つたり、着物が妙く洋服になつた  
 り住む家が不衛生的な無趣味なコンクリートに變つたりしてゐたら、日本は亡びて終  
 ふんだぞ。



日本は今軍備にしても、經濟にしても、教育にしても、決して歐米などに遅れては  
ない。

寧ろ或點に於ては、歐米を凌いでゐるのだ。

殊に個人主義國家で、その國民は物質萬能主義で、名譽や地位にこだはつたり、金  
錢の魅力に陶醉して、一にも金二にも金、三にも金といふ様な、低級な思想は、日本  
には通用しない。

日本の國は、遠い御代の初めに、天祖様の御神勅に依つて定り、萬世一系の天皇が、  
御代を知ろしめす、神君一體の尊嚴なる國體だ。

ために國民の總ては、敬神崇祖の信念が、眞生活の根本だから、君のため國のため  
には、自我を滅して、忠誠を勵み、報恩の生活をするを以て、國民の本體となつてゐ  
る。

ために日本は、一も眞心、二も眞心、三も眞心で、何處迄行つても、遠き神代から  
傳つて來た、御神寶の御威徳が子孫に傳はつてゐる、嚴然たる國家で、この眞心を以

て、君國を守るので、國民は神と君の御寶といふのだ。

畏くも明治天皇が、

善きを取り惡しきをして、外國に

まされる國になすよしもかな

と御製遊ばしたのは、日本は世界萬邦に誇る、絶對的御稜威輝く國體であるけれど、  
世界各国には、人類生活の幸福に役立つ、知識技能文化が澤山秘藏されてゐるから、  
日本の國民は、廣く世界から知能を取入れて、日本の從來傳つて來た、堅實な清淨な  
大和魂で生かして、世界人類の幸福な生活に役立つ様にせよ。  
決して外國かぶれをして、害になるものを取込み、日本の尊い思想習慣風俗等を失  
つてはならぬ。

この思召である事が分るだらう。

この有難い御趣旨を奉體する事が出来ない愚か者が、最近日本の國にも現はれて、  
政治信仰教育方面にも種々の、害毒を流すのを忌はしく思つてゐたのに、現在の我が



子のお前が、僅か四年位の間に、米國かぶれがして、純眞な日本女性の本分を忘れた様な、見苦しい姿を、世間の人に見せて呉れるといふ事は、親として私もお母さんも肩身が狭い。

これからは絶対に、アメリカ式は止めて、純眞な日本娘にかへる事を心掛けなくてはいけないよ。」

と懇々注意しました。品子も言葉を添へ、

「薫さん、お父様の仰有る通りですよ。」

幾らアメリカ人を真似て見た所で、眞のアメリカ人に見えるものではありません。日本の娘は髪も素直な、美しい黒い毛を與へられ、肌の色だつて、世界一調和された美しい色なんです。

それに瞳の色だつて、世界人の美む程美しいのじやありませんか。

そのまゝの自然美を、健康の力で磨けば、眞から美しく輝くものを、何を好んで縮ませたり、染めたりして、見苦しい西洋人の真似をする必要がありません。

又折角日本人として、美しく生れた顔を、變な化粧品で塗り潰して、見苦しくする様な事をしちやいけません。

これからは食物も着物も、出来るだけ、純日本式に變へて、言葉過ひも態度も淑やかな日本婦人になる様に心がけて下さい。

貴女は頭から照子の事を、野暮だとか馬鹿だといふけれど、照子位従順で明朗で聡明で、日本婦人としての資格を備へた娘は滅多にありません。

少しこれからは、アメリカ流を忘れて、本當の日本流を照子に見習ひなさい。」とたしなめました。

薫は頬をふくらまして、

「いゝわ、ババとママと二人して、私の悪口ばかり言ふんだもの。もう知らないわよ。」

と言つて、いきなり立つて自分の部屋へ行つて終ひました。

そして自棄にピアノを叩くのを聞けば、浮華輕佻な洋樂の一曲でした。



二人は面目な氣に、傍に坐つてゐた、明に向つて、

「外國へ行かない前は、あんな子じやありませんでした、全く變つて終ひまして、人様に對しても、面目次第もございません。」

貴方に對しても、全く無遠慮で、平氣で用事をお願いしたりして……。

全くアメリカは、女尊男卑といひますか、男の方が婦人に遠慮ばかりして、尊敬され、女が當然みたい、男子の方を眼下に見て、用事迄言ひつけて、その不遜を省みる事がないといふ、怖ろしい習慣が、矢張りいつとなく感染して、當然だと思つてゐる様子なので、全く困つて終ひます。」

明は笑つて、

「お歸りになつた早々だからでございませうけれど、應て又日本にお馴れになると、日本風の穩やかなお嬢さんにおなりになります。」

「是非さうでないと思つて困るのです。」

ごうか篠原さん、お願いですから、あの子も純真な日本の女性に歸る様にお導き下

さい。」

「とても薫さんはあれだけ、智能常識が發達してゐらつしやいますから、私共の申上げる位の事は、お聞き入れになりません。」

却つて御指導を仰がなければならぬと思つてゐます。」

「全く困つて終ひます。」

あんな調子だと、下の子供達にも、悪い影響を與へますから……。」

と品子は真から困つたらしく、吐息をつくのでした。

## 紅 薔 薇

薫はその後も、一向純真な日本淑女に還る様な修養をしようとはせず、家にある時は、兩親兄弟召使の誰彼にも、米國流を振廻して、威張り散らし、謙遜といふ美德な



ごは、塵程も持つてゐません。

その上よく外出します。

そして幾人かの男子の友人を作つて、社交だと言つては、ダンスホールなどへも平気で出入します。

外國から來る手紙も、女性より男性の方が多いいふ始末で、兩親は悉く困つてゐます。

理想はとても高く、結婚問題になると、すぐに一流の華族か、大富豪でなければと言ひ、又自分が大臣にでもなれる様な事を言つて、威張つてゐます。

日々の小使なども、實に多額なものでした。

餘り薫の行爲が目之餘るので、兩親は恥ぢて、出来るだけ明達にも隠す様にしますが、同じうちですから、見ない譯にも聞かない譯にも行きません。

しかし聰明な明は、主人夫妻の心持を察して、見て見ぬふりをしてゐました。

二月三月が過ぎると、照子も明も目出度く學校を卒業しました。

殊に明は一月一杯、學校を休んだにも拘らず、試験の成績は最も優秀で、首席の榮冠を得ました。

## 愛娘のために

初めの中は、我が家の寄り人位に、簡単に寧ろ内心輕蔑する様な感情で見てゐた明を、父母始め兄弟達迄が心から、信じて尊敬してゐるので、薫は内心不快な念さへ抱いて、反感をさへ持つてゐました。

しかし段々つき合つて見る中に、自然に明の偉大な人格が分つて來ると、いつとなく薫は明を見直す様になりました。

その中明が大學を首席で卒業し、兩親や知人が、

「篠原さんは將來、偉大な成功をする人だ。」



と大きな期待をかけて、讚美するのを見聞きする中に、薫は心秘かに、  
 「或はあの人は、將來優秀な人物として、名を成す人かも知れない。」  
 と感じ初め、段々好意を持つて見出しました。

するとその體格容貌品性人格の總てが、萬人に擡んでた男性である事を見出しました。

そして今迄うちを外に、遊び歩いてゐた薫は、自然に外出の数が少くなつて、家で  
 落着く様になりました。

近頃ではよく明の部屋へ、色々な草花なんかを持つて遊びに来る様になりました。

明は初めの中は、慎しみのないお嬢さんだと、餘り氣にもかけず、當らず觸らず話  
 相手になつてゐましたが、思想がまるつきり相反してゐますので、

「あゝ可哀さうなお嬢さんだ。」

自分では海外に學んで、優秀な智能を修め、特殊な淑女だと信じて居られるけれ  
 ど、何とその思想の輕薄な事よ。

若し男子として、かゝる婦人と結婚したならば、その男子の將來は、ごんなもので  
 あらう。」

と思ふと、想像するさへ、戦慄を覺えました。

だがさうした感情を、明は塵程も表へ出しませんでした。

或日薫は兩親に向つて、

「お父様、これから私、パパとは言ひません。お父様お母様と言ひますから、私のお  
 願ひを聞いて下さらない？」

兩親は笑つて、

「何ですか、今日ば？ 改つてそんな事を言ひ出したりして……。」

「お父様、私のために、ごれだけ財産を下さるんですの？」

兩親は意外の間に吃驚して、顔を見合せました。

「どうしてそんな事を、突然言ひ出したの？」

「だつて財産がなくちや、結婚出来ないじやありませんか。」



アメリカでは、生活の保證の出来るだけ財産がなければ、結婚しないのよ。」  
 「又お前はアメリカとの比較をする。それがいけないんだよ。」

アメリカはアメリカ、日本は日本です。」

「日本の古代の習慣は、婦人は嫁して、夫の家を以て我が家とするといふ事になつてゐるんだから、財産など持つて行かなくとも、女は真心を持つて行つて、よく親に仕へ、夫に仕へて、家風を守り、孝行な嫁となり、貞節な妻となり、賢明な母となつて、圓滿に家庭を治めて、忠孝貞の婦徳を盡すといふ事が、眞の女性の道になつてゐるから、女は財産などなくとも嫁に行かれます。」

「あらお父様、そんな事するいじやありませんか。」

お父様やお母様に、財産がなければ止むを得ないけれど、澤山所有してゐらつしやるのに、相續者である利男さんに全部譲つて、外の子供に下さらないなんて、そんな法はありません。」

「それは幾分かは分けて上げるよ。」

だが子供の方から要求するなんて事は間違つてる。」

「だつてお父様やお母様に、澤山の財産がある場合は、要求したつていゝと思ひますわ。ねえごれだけ私に下さるの？」

拾萬圓ぼつちでは厭よ。」

貳拾萬圓位は頂けるでしょ。」

「まあ、何て事をお父様に申上げるのです。」

「だつて頂かなくちや、つまらないんですもの。」

「薫お前、本當に米國婦人そのまゝの思想になつて終つたんだね。」

それやお前が欲しいと言へば、上げない事もないが、それにはこちらに條件がある。お前が純眞な、溫良貞淑な日本女性にかへつたら上げよう。」

「屹度ね、お父様、私お父様の仰有る様な、おとなしい日本女性にかへつて、自分で理想の人と結婚してもいゝでせう？」

二人は又吃驚して、



「理想の人と結婚するつて？」

お前又何を言ひ出したのだ。」

「私、理想の人があるんですもの。だけご自分から申込むと、アメリカ式だと言って、誤解されますから、お父様お母様から、申込んで頂き度いと思ひますの。」

「一體それは誰なんです？」

「それは篠原さんですわ。」

両親は呆氣に取られて、

「篠原さん？ お前あの人理想だつていふのか？」

「始めは平凡で野莫臭いと思つてゐましたけれど、此の頃あの方の事がよく分つて來ましたのよ。」

だからあの方ならば、結婚し度いと思ふのですわ。

だけごあの人極端なプロレタリアなので當分生活が困難だと思ふの。

それでお父様に、財産を頂いてから、申込んで頂き度いと思ひますの。」

薫が眞面目で言ふのを聞くと、両親は、期せずして思ひました。

「若し本當に篠原が、薫を貰つて呉れたら、どんなに仕合せだらう。」

願へる事なら、美喜子でも貰つて欲しいとさへ思つてゐた位だから……。

しかし薫の性格を思ふと、それは到底不可能な事は分つてゐました。

一度言ひ出したら、聞かない薫の事とて、その夜どうしても切出して欲しいといふので夕食の時に切出す事になりました。

それは明が卒業した喜びを母に知らせるために、翌日母の所へ歸る事になつてゐましたから、その夜は色々照子が女中達を指圖して、御馳走を調べ、心から卒業祝ひをする筈になつてゐたからでした。何氣なく司郎は

「篠原さん、優等で大學を卒業されて、こんな結構な事はありません。」

「これも皆々様の御厚意の賜でございますから、終生忘れは致しません。」

「いゝえ私共こそ、子供が本當にお世話様になりました、貴方のお蔭で學業成績がよくなつたといふだけではなく、本當に眞面目な人間に作り直して頂きまして、こんな



嬉しい事はありません。」

「いゝえ、皆様御生來の御性質がよろしいので、自然に徳性を發揮なさるからでございます。」

と明は少しも自分の功を誇りませんでした。

## 強き意志

「時に篠原さん、突然變な事を申しますが、君は結婚なさる意志はありますか。」

明は意外の言葉に目を瞠り、

「御冗談を仰有るのではございませんか。」

私は大學を漸く卒業させて頂きましたばかりで、就職口も定りませず、生活の根柢もございません。どうして結婚など出来ませうか。」

「いや、その事についてですが、若し生活力が安定するとしたらどうですか。」

「そんな事のある筈がございません。」

私の力をおいて、何處に私の生活の保證が出来ませう。」

「假りに出来たとしたら？」

「假りに出来たと致しましても、いざ結婚するとなると、相手の人物が尊いものではございませんでせうか。」

「それは本人の人物といふ事が、一番大切に違ひない。」

「何故又突然、そんな事を仰有るのでございますか。」

「實は親の口から、こんな事を君に言つては變ですけれど、薫を君に貰つて頂けないかと思ふのですが……。」

これには明も呆れんばかりに驚いて終ひました。

何と答へていゝのか譯が分らなくなつて、司郎の顔を眺めてゐると、今日は珍らしく日本服を着て、机の向ふに坐つてゐた薫が、



「ねえ篠原さん、貴方が私と結婚して下さるなら、お父様は貳拾萬圓生活費を下さるつて仰有るんですよ。」

でも私、貴方の理想に合はないのに、強つてと言つて、お願ひするわけじゃないの。だから誤解しないで下さいね。」

品子は呆れて、

「まあ、自分でそんな事を、口に出す人がありますか。」

「だつて本當の事でももの。理想でないのに、お金のためや両親への義理や人情で結婚して頂いたりし度くないんですもの。」

意志の疎通しない結婚なんて罪惡ですから……。

ねえ篠原さん。」

明も今は黙つてはゐられませんが、度胸を決めて、

「薫様の仰有る事は正しい事です。」

私の様な、全く無力な平凡な人間を、そんなに仰有つて頂きます事は、光榮でござ

いますけれど、身分が違ひますから、御遠慮致します。」

「あら？ 私身分の事なんか申しませんのよ。」

唯金とか義理とか、人情とかのためにでなく、眞實の信愛に依つて結婚して頂くのでしたらつて、申しただけですわ。」

「仰有る事はよく分つてゐます。」

かやうに申上ましては、餘り恐縮ですが、貴女は廣く世界に知識をお求めになりました現代的の淑女であらつしやいますのに、私は全く舊思想に囚はれた、井の中の蛙で、極端なプロレタリアでございますから、到底思想とか、意志が疎通して、圓滿な家庭生活が営まれるといふ様な事は、あり得る事ではないと思ひます。」

薫は半ば失望した様な、又蔑む様な表情をして、

「では篠原さん、貴方は極端に純眞なおとなしい、家庭的な女、つまり照子さんの様な人が御理想なんでせう。」

薫にさう言はれると、明は即座にしかもはつきりと答へました。



「仰有る通りです。」

若し照子さんが来て下さるのでしたら、私は只今でも喜んで頂くとお答へ致し度いのでございます。」

「司郎は大きく頷いて、

「照子なら君貫つて呉れるといふのか。」

品子も喜色を面に現はして、

「篠原さん、照子なら貫つて下さいますか。」

「下さるといふ思召があり、照子さんにその御意志がありますならば、私は喜んで頂きます。」

尤、私一存では、その事をお約束する事は出来ません。

母に相談致しまして、承諾を得ましたならば、喜んでお約束させて頂きます。」

薫は假初に交らした言葉が、こんな事になつたので、内心吃驚したけれど負け嫌ひな氣性だけに、表情にも出さず、

「それだつたら、照子さんと呼んで、考へを聞いて見たら、如何ですの？」

結局照子は薫に呼びつけられました。司郎は

「照子、突然お前にこんな事を聞いて變だけれど、今篠原さんが、お前ならお嫁に貰つてもいいと言はれるが、お前の心持はどうかね。」

照子はさう言はれると、顔を眞赤にして、

「私には父も母もございせんから、今では小父様小母様を、お父様お母様の様に頼つて居りますから、小父様小母様の思召通りに従ひます。」

と答へました。

「さうか、では照子の意志も分つた。」

では篠原さん、兩親ない不幸な子だけれど、人柄は貴方の御承知の通ですから、お母様と御相談が出来ましたら、是非貫つてやつて下さい。

貴方の御都合のよい時迄、こちらで預つてゐて教育します。

又大した事は出来ませんが、貴方の體面が保たれるだけの仕度は、親に代つて私共



がしてやりますし、將來も親代りになつて、出来るだけの面倒は見ます。」

「有りがたうございます。」

若し左様な都合になりました場合は、よろしくお願ひ致します。」

と明は落着いて言つて頭を下げましたが、我が部屋へ歸つてからは、何となく胸が躍つて落着かれない様な喜びを感じます。

それは今迄何處かの世界に、美しく光つてゐた、あこがれの寶玉が、いきなり自分の胸に飛込んで來た様に、光を感じたからであります。

「あゝ、私はついに、自分の眞の寶玉を掴んだ。」

母がどんなに喜ぶだらう。」

と思ふと、

「お母さん。」

と呼んで今の話を早く聞かせ度い思で一杯でした。

照子も同じ思ひで、餘りに思ひがけない幸福の訪れに、胸が一杯になつて、朝迄眠

## 懐しき故郷

明は卒業と同時に學校の幹旋に依つて、四月中旬から内務省に奉職する事になりました。

この吉報と卒業の喜びを一刻も早く知らせ度い心から、明は翌朝母と祖母との待つ、岡山へ歸るべく、特別急行に乘りました。

東京驛へは利男美喜子義之に續いて、照子も見送りに參りました。

假令僅かの間の別れでも、いざ汽車が立つとなると、軽い哀愁を覺えます。

三人の兄弟は

「先生、早くお歸り下さい。」



お待ちして居ります。」

と窓の外から、懐しさうに、明を見上げて、最後の挨拶を致しました。

照子は遠慮勝ちに、三人の後に立つてゐましたけれど、朗らかな明るい純真な顔、輝く瞳には、千萬無量の言葉にも勝る思ひがはつきり現はれてゐました。

明は終始一貫にこゝとして、

「行つて來ます。どうぞお父様お母様お姉様によろしく仰有つて下さい。

照子さん、有りがたうございました。では行つて參ります。」

と朗らかに、言葉をかけました。

「どうぞお大事に、お母様によろしく、お祖母様をお大切に。」

汽車は動き初めました。

四人は帽子やハンカチを振つて、合圖をしてゐます。

明も見えなくなる迄それに答へてゐましたが、聽て自分の席に落着くと、生れてか

ら初めて知る、本當の幸福といふものを、泌々感じました。

靴の中に持つてゐる、大學の卒業證書、東京驛で残して來た、照子の美しい姿、四月から内務省に勤める事に決つた事、母がどんなに喜んで呉れるだらう。

母は今日のために、二十四年間、自分の生命を犠牲にして、生きて來て呉れたのだ。祖母も私のために、どんなに心配もし、苦勞もして助けて呉れた事だらう。

と思ふと、いつか胸が一杯になつて、感謝の涙か目頭に滲んで來ます。

明は嬉しさの餘り、涙が溢れて落ちて落ちるのでした。

今こそ母と祖母に報ゆる時が來たのだ。

これからはどんなにして、母や祖母に報ひやう。

兎に角今の家を片付けて、東京に移るんだ。

二三年の間は、私の収入では、決して豊かではないけれど、幸ひ多少貯金が貯へてある。

母の力なら、必ず僅かな収入でも、圓滿に生活を處理して呉れるに決つてゐる。そして生活の基礎がはつきり定つたら、照子さんを迎へよう。



母が照子さんを信じ愛してゐる事は、自分以上だ。母は病院で、照子さんの様な娘が、自分にあつたなら、どんなに仕合せだらうと言つた。

それが今實現しやうとしてゐる。

自分は到底、與へられない運命の様に思つてゐたのが、薫さんのお蔭で、妙な行掛りから、宗方さん御夫婦が先に心を動かして呉れた。

薫さんが躍起になつて勸めて呉れた。

そして照子さんが心から讃意を表して呉れた、實に微妙な動きだつたのだ。

自分が可なり永い間、見續けた美しい夢が、現實となつて現れた。

その時自分はどんなに驚喜した事だらう。

照子さんも内心喜んでゐて呉れるらしい。

その後の態度で、充分知る事が出来る。

薫さんは両親を説いて、貳拾萬圓の資産を貰ひ受けて、生活費の基礎を安定して、

自分と結婚しやうと、本気で言つてゐた。

あれが純真な米國思想といふのだらう。

両親も我が子の可愛さに絆されて、萬一自分が承諾したなら、薫さんと與へてもよいといふ様な考へから、あんな話を持出されたのだ。

だが薫さんは、両親にかまはず、金や義理や人情で、承諾する結婚なら、勿論お断りする。

眞の理解と愛情が主體でなければと、外國思想の様な、日本思想の様な事を主張して、餘り見榮を張られたゝめに、突然の事として、自分として、薫さんに眞の信頼も愛情も持つてゐない者が、あらゆる事は言はれないし、殊に貳拾萬圓の資産と言はれたのが、自分の心に大きく響いて、何となく人格を、汚された様に感じたゝめに、いつにない勇氣が出て、身分も性格も教養も甚しい差がありますから、遠慮するときつぱり言つた言葉が、薫さんの胸にひびく響いて、照子さんを例に引いて呉れたのが、自分にはこの上ない仕合せだつた。



この機会を逸しては、再び好機来らずと感じた瞬間、自分にも驚く程心が落着いて、それこそはつきりと、真心から照子さんを下さるならば、喜んで頂きます。

と言つた言葉が、圖らずも宗方さん御夫婦又薫さんの胸を打つて、薫さんの一言が、遂に照子さんを與へてもいゝといふ話に進み、照子さんの意志の表明迄得る事が出来たんだ。

世の中つて、何といふ微妙なものだらう。

全く自然の力じやない。奇蹟の様に思はれる。

假令薫さんに、百萬千萬の財産があつたとして、自分の意志は微動もするものじやない。それに反して、照子さんだつたら、自分のためにも母のためにも、無限な寶玉だ。母に對して、將來の幸福を齎し、海山の恩に報ずるのには、照子さんの様な婦人を迎へて、母に仕へて貰ふ事だ。

この意味から言へば、何物にも代え難い寶を掴んだ幸運兒だと思ふと周圍が悉く明るく朗らかで、喜びに満ちてゐる様に感じました。

明が翌日家へ着くと、母は喜んで、

「お、明、今お歸りかい。驛迄迎へに行つて上げようと思つたけれど、一寸お祖母様の工合が悪いので、手が離されないものだから、行けなくて悪かつたね。」

「いゝえ、お母さん、迎へになど来て頂かなくても結構です。」

と言つて、靴を脱いで座敷へ上ると、きちんと坐つて手を突いて、

「長い間、色々ご心配して頂きましたけれど、お蔭様で首席は外へ譲らずに卒業させて頂きました。」

本當に有りがたうございます。」

智恵子は涙含んで、

「本當にあんな思はぬ災難で、一月も學校を休んだから、今度の成績はずつと下るだらうと思つてゐたのに、首席で卒業する事が出来たといふ事を知らせて貰つて、私は吃驚しましたよ。」

本當に結構でした。」







永い間お母様お祖母様に、海山の御恩を受けましたけれど、今からは萬分の一の御恩返しを致さうと思ひます。

どうぞ御安心下さい。よくこれ迄お守り下さいました。」

とお禮を述べて頭を下げ、改めて顔を洗ひ、口を嗽いで、證書を神前に捧げて暫し黙禱して、感謝の祈りを續けました。

その敬虔な態度に、智恵子も祖母のときも胸を打たれて、感謝の涙にむせびました。

### 波路越えて

と、その時です。表から

「御免下さい。」

と訪れた人があります。

智恵子が急いで、出迎へて見ると、一見五十位の眞に正直さうな、上品な紳士が立つてゐます。

「貴方は誰方様でゐらつしやいますか。」

「こちら様は、篠原智恵子さんと仰有るのですね。」

と先づしつかり確めました。

「はい、左様でございます。私が篠原智恵子でございます。」

「左様でございますか。私はこの度南米から歸りました者で、名前は富森勳と申します。」

と言つて名刺を出して示し、

「私は二十年餘り、あちらで篠原好雄君のお世話になつて、共同事業を營んで居りました者でございます。」

「まあ 左様でございますか。」



兄からも時折貴方様の事を、手紙で承つて、喜んで居りましたのでございます。兄も初め五六年の間は、非常に苦心したけれど、この頃は土地にも馴れ、澤山氣心の合つた知人も出来、殊に義侠心の強い快活な富森勳といふ方と、義兄弟の約束を結んで、コーヒー栽培の農園を經營してゐるが、お互に五十歳になつたら、一度故郷へ連れ立つて歸らうと約束してゐるから、今度歸る時は、篠原家を復活させると言つて、元氣のよい頼もしい手紙を呉れますので、喜んで居りましたが、それは貴方様でございましたか。」

智恵子は、自分でさう言つて話し乍ら、心の中で、

「この人が今内地へ歸つてゐらつしやつたのに、何故兄は一緒でないだらう。」と胸は不安に襲はれました。

富森は智恵子に向つて、氣の毒さうな表情をして、

「實はさういふお手紙も、屢々お書きになつてゐた位ですから、勿論二人はあちらでも、眞實の兄弟以上に親しくして、何事も協力してやつてゐましたので、大分農場も

澤山手に入れました、相當人をも使用して、大規模にこの四五年前からやつて居りました。

所が私が今日お伺ひしましたのは、悲しいおたよりを持つて、伺つたのでございます。」

「まあ、それは、ごんな事でございませう。

兄が病氣でも致しましたのでございませうか。」

「いやまだそれならよろしいのでございますが、實は昨年九月十日の日に、農場を見廻つてゐられる中、突然腦溢血を起されまして、亡くなつて終はれました。」

「えゝつ?! ?あの兄が?」

智恵子は驚きと悲しみのために、思はず大きな聲を立てました。

奥ではとき江が、聞き咎めて、

「智恵子、好雄があちらで死んだつて?」

富森はその聲を聞くと、



「あれは誰方でございますか。」

智恵子は、涙に曇る聲で、

「母でございます。母は兄が五十になつたら、歸る／＼と言つて寄越しましたので、兄の顔を一度見てから死に度いと申して居りましたのに、あの元氣な氣丈な兄が、本當に南米で死にましたのでございませうか。」

貴方臨終を見届けて下さいましたのでございませうか。」

「お母様が待つてお出でになつたのに、こんな悲しいおたよりを持つて参りまして、何ともすみません。」

失禮ですが、一寸お母様にお目にかゝらせて頂けませんでせうか。」

「随分取散らしてありますけれど、どうぞ逢つて上げて下さいませ。」

昨年春から老衰病で寢んで居りますので、起きて出てお目にかゝる事が出来ません。

失禮でございますけれど……。」

「結構でございます。では失禮させて頂きます。」

富森は奥の母の寢間へ入つて参りました。

そしてそこにこの家には適應しくない程の、品性人格の備つた青年が坐つてゐるのを、不思議さうに眺め乍ら、軽く挨拶して、とき江の枕許に坐ると、

「初めてお目にかゝります。」

貴方が篠原さんのお母様でゐらつしやいますか。

私は二十年前に南米で、篠原さんと義兄弟の約束を結んで、事業を共同でやつて参りましたので、時々貴女の事も妹さんの事も聞いてゐますので、かうしお目にかゝると、自分の母の様に思はれて、お懐しう存じます。」

「有りがたうございます。」

今伺ひました所に依りますと、好雄があらで亡くなつた様でございますが、本當でございますか。」

「誠に残念な事でございますが、事實なのでございます。」

篠原さんは、始終日本の國を去つて、遠く南米迄乗出して來た動機も私にお話にな



りました。

そして五十になつて、纏つた金が出来たら、農場を誰か適當な人に譲つて、篠原家を復活させて、年老いた母の面倒を見る。

そして妹に苦勞をさせてゐるから、妹にも報ひなければならぬと、口癖の様に言つてゐられました。

それに妹さんには、お子様があるとの事も伺ひましたが……。」

とき江は、

「その子供と申しますのは、これでございます。」

と明を指しました。

「これも生れる前から、或事情で父に生き別れて、母親の手一つで大きくなりました。それだけに母が苦勞しましたけれど、お蔭で今度東京の帝大を優秀な成績で卒業させて頂いて今歸りましたので、うち中で喜び合つてゐた所でございます。

好雄が亡くなつたといふ様な、悲しいたよりを同じ日に聞かねばならぬといふのは、

何といふ因果な事でございます。

「お察し申上ます。何ともお慰さめ申上げようもございません。

篠原さんも、五十になつたら、日本へ歸らうよと言つて、あんなに楽しんで居られましたのに、私がお骨を持つて歸らうなんて、まるで夢の様な心持が致します。

この方が明さんと仰有る妹さんの坊ちゃんでございますか。

立派に御成人になりましたので、帝大を御卒業になりましたのですか。

その様なお目出度い所へ、私がおんな事をお知らせに伺ふなんて、誠に申譯ない次第でございます。」

## 兄の遺産

この時初めて明は、居住を直して、



「初めてお目にかゝります。

私が好雄の甥の明でございます。」

「私が富森勳でございます。」

「伯父が永い間、南米で貴方様と御昵懇に願つて居りましたさうで、有りがたうございます。伯父の急死などいふ事は、全く思ひがけない事で、誠とは思はれませんが事實貴方が、伯父の最後に立會つて頂いたのでございますか。」

「はい、始終共同で事業を營んで居りましたので、昨年九月の十日に、一緒に農場を見廻つて居りました中に、突然脳溢血を起して倒られましたのでございます。」

「ではそのまゝ絶命致しまして、何も言ひ遣しは致しませんでございましたでせうか。」

「はい、御本人はそのまゝ絶命されました。」

しかし御安心下さい。蟲の知らせでも申しませうか、その前の晩二人はいつになく、愉快にお酒を呑んで話し合ひました。

その時篠原さんが、言はれますのに、

「もう二年たつと、故國へ歸るんだ。」

と言はれました。そして二人で色々故國へ歸つてからの事など、楽しく語り合ひました。その時ふと篠原さんが言はれるのに、

「人間といふものは、老少不定といふから、今夜二人でかうして、楽しく語つて、百年の計を計つて見ても、明日の事も分らないんだから、ごちらに萬一の事があつても、骨だけは故國の遺族に届けやう。」

そして財産も残つた者が始末して、二つ分けにして、半分は遺族に渡す事にしやう。と言ひ出され、二人で約束したのでした。

それが偶然に當つて、翌日篠原さんが亡なられたものですから、私は驚き悲しむと共に、大きな責任を感じ、又自分の事や、國に残した家族の事を思ふと、じつとしてはおられなくなつたので、あちらで非常に信用のある懇意な人に頼むと、非常に同情して、農場をそのまゝそつくり、三十萬圓で引受けて呉れたので、それと遺骨を持つて、一月南米を出まして、一昨日横濱に着いたばかりで、まだ自分の故郷へも参りま



せんでございます。」

と言つて、大切に白木の箱に納めて来た、遺骨を恭しく頂いて前へ出しました。

「これが御遺骨でございます。」

そしてこれが只今申上りました、遺産を整理致しましたお金、十五萬圓でございます。

これは明様、貴方に受取つて頂きます。」

と言つて差出しました。

三人は夢に夢見る心地で、暫くは手を伸べて遺骨を受取る事もしないで、ちつと眺めてゐましたが、富森は自分の責任を果すと、改めて別に香料を紙に包んで差出し、

「私も御葬儀に立會はせて頂き度いと存じますが、まだ自分の家へも參つて居りませんから、一應これで失禮致します。」

と言つて、辭去しました。

三人は夢見る様な心持で、唯悲しみの涙に泣き暮れつゝ、懇ろに供養致しました。

## 妙法の世界

岡山の本願寺で、懇ろに好雄の葬儀を済ますと、氣が弱つたものか、その夜とき江は急に變りが来て、

「明が學校を卒業して、職も決つたから、心にかゝる事は何もない。

永い間逢ひ度いくと、夢にも忘れず待つてゐた、好雄が歸つて来た以上、これで私はこの世に思ひ残す事はないから、好雄と一緒に、結構な極樂世界へつれて行つて頂くから、喜んでお呉れ。

智恵子、これからお前は仕合せになるだらう。

明、お母さんには永い間、苦勞をかけたのだから、一生大切にして上げてお呉れよ。」  
これが臨終の遺言でした。



その死顔は、につこりとして、此の世から佛の相が現はれてゐました。  
智恵子と明は、餘りの事に極度に悲しみ乍らも、泣くく又母の葬儀をすますと、  
永い間住み馴れた、懐しい岡山の家を疊んで、二人揃つて藤村家の父を訪れました。

### 焦 瘁 の 父

古人は十年を一昔と申しました。

二十四年は二昔半 になります。

この間に萩野町の唯一の資産家であつた藤村家は、果して榮えてゐたでありませうか。

否今や滅亡一步前の窮地に迫つて、敏郎は塗炭の苦しみに、喘いでゐたのでした。  
二人は先年の約束を果すべく、驛から自動車を駆つて、乗付けて見ると、藤村家の

門構へその他は、以前と何等變つてゐませんので、安心して二人は言はず語らず、嬉しさを懐しさが胸一杯に満ちて、いそぐと中へ入りました。

「御免下さいませ。」

玄關で聲をかけますと、女中が現れて參りました。

「おらつしやいませ。何御用でございませうか。」

「旦那様はお出でになりますか。」

女中は變な顔をして、

「はい お出でになります、少しこの頃御氣分がお悪くて、引籠つてお出でございませうので、誰方がお出で下さいませしても、お断り申上げてゐるのでございませうが……。」

「では 奥様はお出でになりませうか。」

女中はいよく怪訝な顔をして、

「こちらには奥様はございませうが……。」



「今度は智恵子が驚いて、

「奥様はごう遊したのでございませう。」

「私はよく存じませんが、五年程前に、御病氣でお亡くなりになりましたさうでございしますが……。」

「あら まあさうでございましたか。一向存じませんで、失禮致しました。」

「それでは御隠居様は？」

「御隠居様の事は、私ちつとも存じませんけれど、今年七年忌をおつとめになりましたたのございますよ。」

「今度は明が顔色を變へ、

「ではお祖母様は、もう亡くなつたのですか。」

「明、本當に残念な事をしましたね。」

「御健康な間にお目にかゝりに來ればよかつたのに……。」

「本當に惜しい事をしました。」

「今日迄生きてゐて下さるとよかつたのに……。」

「では貴女、こちら様には、お子様がお二人お有りになつたでございませう。」

「はい、お有りになつたさうですが、坊ちやまはごういふ事か御自殺なさいましたし、お嬢様は、別荘の方で、奥様より四月程前に、お亡くなりになつたとか伺つてゐますけれど、本當の事は存じません。」

「まあ、そんな御不幸な事になつてゐましたのでございませうか。」

「智恵子は思はず涙含んで申しました。女中は訝し氣に、

「貴女様方は、ごちらからお越しになりましたのでございませうか。」

「私達はこの家に深い因縁のある者でございませう。」

「旦那様が御氣分が悪くて、お寢みになつてゐますなら、誠に恐れ入りますが、智恵子と明がお伺ひ申しましたと、おつたへして下さいませんか。」

「はい、あの智恵子様と明様でございませうね。」

「左様でございませう。」



「では一寸お待ち下さいませ。」

女中が入つて行くと、二人は聞く事毎に驚くべき事ばかりなので、懐しいやら悲しいやらで、胸を躍らせて待つてゐました。

と足音も慌しく、そこへ現はれたのは、年こそ老けてゐるが、一日一時も忘れもせぬ敏郎その人でした。

「お、智恵子、お前来て呉れたのか。」

「旦那様、お懐しうございます。」

「お父様、僕です。九つの年にお別れした明です。」

「お、お前は明か。お前そんなに大きくなつて、……立派な青年になつて呉れたなあ。」

私は一時も忘れず、訪ねて来て呉れるのを待つてゐたぞ。」

「お父さん、お懐しうございます。」

敏郎は餘りの嬉しさに、

「お前達が訪ねて来て呉れたのは、本當とは思はれない。

まるで夢を見てゐる様だ。」

「でも貴方、お變りがなくて、結構でございますわ。」

「幸か不幸か、今迄命だけはあつたんだ。」

うちの事は、まるつきり、昔とは何もかも天地の相違なんだ。」

「今女中さんから、お母様や奥様やお子様方が、お亡くなりになつたといふ事を聞きまして、吃驚致しました。」

本當にお心持をお察し致しますわ。」

「それもあるんだが、お前達は、よく／＼悪い時を選んで来て呉れた。」

私はお前達の顔を見て、嬉しいやら悲しいやらで、氣も變になりさうだ。」

「まあ、貴方、ごうなすつたのでございますの？」

「お父様、お顔色も悪い様ですが、ごうかなすつたのですか。」

「まあ、こんな玄關では、話も出来ぬ。」



私の部屋迄来てお呉れ。」

「上らせて頂きましてよろしうございますか。」

「いゝども、もどくお前達の家なんだ。」

それに今では、お前達がごこへ入つても、氣を兼ねる者は一人も居らぬ。」

二人は敏郎の後について、座敷へ入りました。

## 因果は巡る

二十四年ぶりに来た智恵子には、何も彼も、目に觸れるもの、皆懐しいものばかりでしたが、人の好きうな下女も下男も顔が變つて、自分を知つてゐて呉れる者は一人もありません。敏郎は女中に、「みわよ。これはうちに取つては、大切な人達だから、粗忽のない様にして、澤山御馳走して差上げる様に支度をしてお呉れ。」

熱いお茶、それからお菓子も持つてお出で。」

女中がお勝手へ退ると、二人は待兼ねて、

「貴方、何だかうちのかが、變に淋しいじやございませんか。」

そして何だか大變な事がある様に仰有いましたが、何でございますの？」

「お父さん、僕あれからお母様に色々御心配頂いて、勉強して、この三月帝大の政治経済科を卒業させて頂きました。」

そして四月中頃から、内務省で勤めさせて頂く事になりました。」

「何?! 明、お前帝大を卒業したつて? 本當か智恵子。」

「はい、お蔭様で、首席で卒業させて頂きましたの。」

「さうか。それは知らなかつた。」

よく明もやつたが、智恵子もよくそれ迄苦心して、勉強させてやつて呉れた。

それには、人にも言はれない様な、血の滲む様な苦勞をしたらう。」

「とてもお母さんに、大變な苦勞をかけました。」



「お父さん、お母さんにお禮を言つて下さい。」

「智恵子、本當にすまなかつた。私は心から禮を言ひます。」

私は、明がこんなに成人して、學業を大成して來て呉れた姿を見ると、父として面目なくて、眞面目で顔が合されない。」

「そんな事はございません。」

明が今日恙なく、學業を終らせて頂きましたのも、貴方やお母様のお力でございます。」

「いや、さうじゃない。そんな事はない。」

「いゝえ、ない事はございません。」

「だつて 私は、一厘も明に小遣も學資も送つては居らぬ。」

父として送り度いのは、山々だつたけれど、お前達の居所が分らなくて、送れなかつた。それだけに私は、親として遣瀨ない、悲しい思をし乍ら、今日迄お前達の健康と明の成業を、神かけて祈つてゐたよ。」

「有りがたうございました。そのお蔭があればこそでございます。」

貴方は少しも明のために力にならないと仰有いましたけれど、お別れする時に頂きましたお金が、どんなに明のためになりました事か……。」

「あればかりのお金が、何の足しになるものか。」

あれが別れと知つてさへ居たなら、纏つた金を渡しておいたものを。」

お前が何も彼も秘密にしてゐたものだから、遂氣がつかずにあた。」

後でどれだけ残念に思つたかも分らなかつたよ。」

「あんなお約束をしておいて、無斷でお別れしたりなんか致しまして、本當にすみません。けれど私と致しましては、あゝするより外、道がございませんでしたもの。」

「何も彼も後で解つた。」

だから私は今日迄、一度もお前を怨んだ事はない。」

唯自分の不明のために、次々に失敗しては、お前達を深く愛し乍ら、却つて苦しめてゐる自分の愚かさを悔いてゐたんだよ。」



「まあ 勿體ない。そんな事を仰有いますと、私身の置場もない様に感じます。それに明がお母様にお目にかゝつた時、お小遣にと仰有つて下さいましたお金の事、後で明に聞いて、吃驚致しましたけれど……。」

あれが千圓近くございましたので、非常に力になりました、助けて頂きました。それでですから、いつも明はお母さんの力だと言つて、感謝して呉れますけれど、私一人の力ではない、お母様や貴方のお力が、どんなに明の勉強を助けて下さつたかと思ひますと、本當に勿體なく、又有りがたく感じましたので、卒業したらお禮に伺はうと、喜んで居りましたのに、今日迄待つて下さらず、お母様がお亡くなりになるなんて、本當に残念な事を致しました。

その後も尙御不幸な事ばかりが續きましたさうで、お氣の毒様でございます。」

明は敏郎の顔を見凝めて、

「お父さん、先刻に何だか氣にかゝる様な事を仰有いましたが、何か差迫つて御心配な事があるのではございませんか。」

「どうも普通ではない様な御様子ですが……。」

「折角お前達が、揃つて喜ばせに来て呉れたのに、こんな事は聞かせ度くないが、この藤村の家も、何かの天罰か、かういふ時機が来たのか破産して、三日後にはこの家も屋敷も債権者に渡さなければならぬ事になつたのだ。」

「えゝつ？ 貴方それは本當ですか？」

「お父様、何故、そんな事になつたんですか。」

本當の事を聞かせて下さい。」

敏郎は悲壯な面持になつて、

「かういふ運命に直面して見ると、始めて人の苦しみがよく分る。」

今こそはつきり、智恵子の兄様の心持もよく分るんだ。

私かもう少しあの時、考へが深かつたら、篠原家を破産させて、兄さんを遠い南米なごへやりはしなかつた。

それを思へば私は私は慚愧に堪えない。」



「貴方、兄は昨年九月南米で死にました。」

「え、つ?! 兄さんが亡くなられた? それは本當か。」

「本當でございます。」

兄も一生懸命働いて、資産を作り、五十になつたら故國へ歸り、篠原家を再興して、母の面倒を見ると言つて、死ぬ迄獨身で働いてゐたさうですが、天魔に襲はれたものか、喜びの日も待たず、異郷の地で永眠して終ひました。

そのお骨を受取りまして、泣く泣くお葬儀をすました夜、母も亦明の卒業證書と兄の遺骨を枕元において、

「これで思ひ残す事はない。」

好雄と一緒に楽しい浄土へ行く」と言つて、につこり笑つて眠る様に逝つて終ひました。

僅かの間に、悲しいお葬式を、明と二人で泣く泣く二つ出しました。」と詳しい話をしました。

「あゝさうだつたか。それは残念な事をした。」

お母様もお氣の毒だつた。一生悲しい淋しい思ひをなすつた事だらう。

兄さんは又、何といふ不幸な事だつたらう。

五十と言へば後二年じやないか。

全くこれは運命の悪戯といふより外に仕方がない。」

「本當にこれは運命ですから、どんなに悲んでも仕方がございません。」

でも兄は急病でばつたり亡くなりましたので、氣の毒ですけれど、希望に満ちくた活氣のある日常生活をしてゐたのですから、苦痛といふものは、ちつとも心身に受けませんでした。

お母様も又明の卒業と、兄の歸る日を、指折り數へては待つてゐたのですけれど、明が目出度く卒業して歸つて、喜んでゐる最中に、兄のお骨を届けて頂きましたので、母も一時は非常に力を落して、見る目も可哀さうでしたけれど、日頃強い信仰に生きてゐましたため、諦めも早く、亡くなる時は、好雄と一緒に結構な世界へ行くのだから



ら、喜んで呉れと言つて、につこり笑つて息を引取りましたので、悲しい中にも子として、言ひ知れない喜びを感じました。」

「さうだつたか。重ねくも惜しい事をした。」

私はそんな事があらうとは、夢にも思つてゐなかつた。」

「お父さん、どうしてうちは破産しなければならぬのか、その事をお話下さいませんか。」

「聞いて呉れ。實はかうなんだ。」

と敏郎が出来るだけ落着いて、話しましたが、その事情は次の様でした。

智恵子が母や明をつれて、敏郎に告げずに病院を去つてから、よく事情を聞くと、その原因は好美と秀子が訪ねて来た爲といふ事が分りました。

ために敏郎は非常に憤慨して家に歸ると、秀子と好美にその理不盡を責めました。

母の幾代もそれを聞いて、餘りの事に秀子を責めると共に、我が子乍らも餘りに悪慄な好美を叱つたので、好美は腹を立て、

「家のためを思へばこそ、心配する自分なのに、それを悪く言ふなんて間違つてゐる。と激昂し、兄や母に逆襲しましたので、可なり激しく口論致しました。」

これがために、我儘な好美は、

「そんなに兄さんやお母さんが、私を悪く思ふなら、もう絶対にうちへは來ません。」と言つたので、

「來なくつたつて誰も困りはしない。」

と敏郎が應酬したのを好美は非常に腹を立て、挨拶もせず飛出して行つて終ひました。

それから敏郎は、一層秀子に對する感情が冷くなつて、誰が見ても夫婦とは思はれない程冷淡なものでした。

従つて子供に對する愛情も、薄いために二人の子供は不幸でした。

委子が夫の感情を害したのは、自分の罪であると氣付いて、真心からその罪を詫びて、夫の機嫌を直す事に、最善の努力をすれば、多少の融和も計れて、幾分和やかに



暮す事が出来たのですが、根が勝気で聰明でない女性の事とて、却つて嫉妬心を深く持つて、何彼につけても夫を怨み、何處かに智恵子を住ませてゐて、折々尋ねて行くのだらうといふ様な事はばかり言つて、疑ひ厭がらせるため、却つて敏郎は腹を立て、うちにゐても、別な部屋に寝起したり、餘り妻らしく口を利いたりしません。

これがために秀子は淋しさ遣瀬なさも手傳つて、元來の虚榮贅澤心で、この空虚さを紛らさうとして、始終子供をつれては、東京へ遊びに行つたり、絶えず贅澤品を東京から取寄せて、母の幾代や敏郎には侷めもせず、自分や子供ばかりで食べるといふ風で、我儘をし盡し乍ら、近所や親戚に對しては義理立をするといふ様な、主婦らしい事は一つもせず、我儘勝手に過しますので、世間の物笑ひの種となつてゐました。その中に東京の父が死亡し、その後兄が事業に失敗して破産すると、仕送りもなくなり、持つて来た小遣も使ひ果したので、今度は町の店から、色々なものを借りて使つたり食べたりするので、いつも敏郎と問題が起りました。

けれども敏郎は藤村家の體面を考へて、内輪では争ひ乍らも、結局は全部仕拂つて

參りました。

このために年々數千圓の冗費ひをするので、幾代は氣違ひの様になつて、

「これではうちの身代は、秀子に食ひ潰されて終ふから、離縁する。」

と言ひ出しました。けれども秀子は

「離縁するなら、喜んで行きましょうが、二人の子供を教育して、一生食べて行かれるだけの金を呉れ。」

と言つて、承知しないので、離縁するといふ事も出来ず、舞子に別荘を建て、そこに子供二人と下女をつけて住ませる事になりました。

そして僅か十年ばかりの間に、十萬圓以上の金を費ひ果し漸く二人の子供が成人して、ほつどする間もなく兄は學校で先生から素行上の事で嚴しく叱られたのがもとで厭生觀を起して、十八の時信州の淺間山へ行つて、噴火口に飛込んで自殺したのです。これがために秀子は、狂氣せんばかりに悲んでゐる中に、女學校の三年に通つてゐた娘が、ふとした風邪が原因で寝込んで、永らく床に就いてゐる中に肺結核になつて、



一年の餘も患つてゐたので、敏郎も秀子に對する愛着は毛頭なくとも、我が子可愛さに、折々訪ねて来ては、慰めもし、必要なだけの費用は惜しみなくかけましたが、遂にその甲斐もなく、翌年の秋十七歳を一期として、哀れに散つて終ひました。

かうした事が次々に起るのは、自分の不徳の罪に依る事と氣がついて、懺悔すればよいのですが、何處迄も強慢に生れついた秀子は、改心どころか子供の不幸を、皆敏郎の所爲の様に感じて怨みました。

この子の病氣中に、一つの大問題が起りました。それは永い間家に寄り付かなかつた好美が、兄の敏郎の不在を見計つて、時折は家へ出入りして、母から小遣を強請つて行く様になつたために起つた事でした。

或時敏郎が旅行に行つた留守にやつて来て、老いた母に小遣をねだりましたが、要求する程與へられませんでしたので、兄の不在を幸ひ、兄の書齋に入つて、大切な手文庫の中に藏つてある實印を出して、幾枚かの紙に押し、素知らぬ顔で去りました。

そして夫と共謀して、兄の保證にして、何萬といふお金を最も悪悚な金貸に、事情

を打明けて借り込んで費消して終ひました。

藤村家では二年ばかりは知らずにゐましたが、三年目になると、突然債權者から、厳しい催促を受けたので、幾代も敏郎も腰を抜かさなばかりに驚き、今更乍ら好美の悪悚さに愛想をつかしました。

こんな事を表向で争へば、眞實の妹好美が收監される事になるから、それでは母に對して氣の毒でもあり、世間へも面目ないといふので、敏郎は斷腸の思ひで、山林や田地を賣つて、十萬圓以上も支拂ひましたが、何分秀子の方の經費と兩方なので、どれだけ金を作つても追ひつきませんでした。

その中に秀子も散々我儘を言ひ盡し、贅澤し盡した揚句、我子の病氣が感染して、胸の病を病み、一年餘り床に就いてゐましたが、遂に淋しく逝きました。

それでも臨終の前には改心して、一度だけ敏郎に逢ひ度いと、頻りに使を超越すので、行つて見ると、秀子は瘦細つて、見るも哀れな姿を横たへてゐましたが、敏郎を見るとき、ほろ／＼と涙をこぼし、



「貴方、よく来て下さいました。私は今こそはつきりと自分の罪を悟りました。初めから女の道を踏み過り、貴方と智恵子様、御圓滿な中を、無理に割かせて、我から進んで娶つて頂きました。」

それでゐて私は貴方に對しても、お母様に對しても、現在腹を痛めて生んだ我子に對しても嫁らしい道も、妻らしい務めも、親らしい行一つもした事はありません。唯役にも立たない、學校を卒業した事を誇り、父の資産や地位に頼つて、傲慢虚榮贅澤といふ夢にあこがれて、間違つた道ばかり踏んで來ました。

そして貴方の一生を滅茶々にし、藤村家の名譽地位財産に傷をつけ、二人の子供に先立たれて、私は今淋しく死んで行きます。

これは皆自分の蒔いた罪の種が芽生えたのでございます。

それを刈り取つて行くのでございますから、後の世が怖ろしうございます。

罪深い秀子でございますけれど、一口だけ總ての罪は許したと、貴方の口から聞かせて下さい。それでなければ私、死んでも死なれません。」

と手を合せ、大粒な涙をこぼして頼むのを見ると、敏郎も哀れに感じ、その手を取つて、

「心配しなくてもいい。」

何事も因縁事だ。お前だけが悪いのではない。

私としてもお前にも、子供にも夫らしい親らしい眞實さに缺けてゐた事を思ふと、詫び度い氣持で一杯だ。

心で濟まなかつたと泣いてゐたんだよ。

お前が今、さうした美しい心になつて、前非を悔いてゐる者を、誰が咎めるものか。神様だつて佛様だつて、屹度許して下さいよ。

だから安心して、何も彼も奇麗に諦めて、清浄な世界に救はれて行きなさい。」

と言葉優しく慰めると、

「有りがたうございます。これで私は心の曇が晴れ、喜んでこの世からお暇頂いて參ります。色々貴方にはお世話様になりました。厚く御禮申上ります。」



そして最後に一つだけ、お願いしておき度い事がございますの。」

「それは何だ。私で出来る事なら聞いて上げるから言つて御覧。」

「外ではございません。若し智恵子様や坊ちやまが御健康でこの世にお出でになりましたら、是非藤村家へお迎へになつて、親子仲よく圓滿にお暮し下さいます様、これだけがお願ひでございます。」

敏郎はそれを聞くに感激して、

「お前がそんな美しい心になつて呉れたかと思ふと、私は嬉しいよ。」

智恵や明が聞いたなら、どんなに喜ぶ事だらう。」

と言ふと秀子は喜んで息が絶えたのでした。

秀子の事は哀れにも憐なく、解決がついたけれど、治らないのは負債の事で、何とかして、家屋敷だけは手離し度くないと、數年間無理な工面をして、今日迄維持して來たけれど、借金の金高が嵩んで、資産より大きくなつた事と、債権者になつてゐる好美の夫が、赤化思想で、日本にゐられなくなつて、夫婦手を携へて、支那の方へ逃

亡して、行方を晦まして終つた事から、急に債権者が厳しく取立て、來たので、今はどうする事も出来ないで、家屋敷附屬建物の總てを、債権者に引渡して終ふ事に今日話を決めたのであります。

## 悲壯な決意

この詳細の事情を物語り終ると敏郎は、

「私は藤村家を滅亡させた責任者として、到底この土地にはゐられないから、東京か大阪か、又は滿洲へでも行つて、何か自分に適當な仕事を選んで、残る命を幾分なりとも君國のために捧げようと、漸く決心が今日出來た所へ、お前達が來て呉れたのだ。」

二人は長い物語を聞いて、今更の様に驚いてゐましたが、明は突然

「お父さん、一體債権者に支拂ふお金といふのは、全部で何程必要なのですか。」



「八萬圓程なんだ。元は僅かでも、利が高いので、こんな事になつて終つたんだ。」  
明はそれを聞くと、ほつと安心したらしく、母の顔を見て、

「お母さん、一寸。」

と言つて次の間へ母を誘つて行きましたが、二言三言話したと思ふと、すぐ戻つて来て、明は大變元氣よく、

「お父さん、お喜び下さい。」

そのお金は僕が持つてゐますよ。」

「何？ お金を持つてゐる？ 明八萬圓だよ。」

敏郎が驚いてさういふと、

「お母さん、丁度幸ひでしたね。」

これが天の助けといふのでせうか。」

「本當によかつたわね。お間に會つて……。知らずくの間、神様がお導き下さつたに違ひありません。」

明は鞆の中から、貯金の通帳を取出し、

「お父さん、こゝに十五萬圓金があります。」

この中から八萬圓でも十萬圓でも、お父さんのいるだけお使い下さい。」

敏郎は目を睜り、

「どうしてこんな大金を持つてゐたの？」

「貴方、それは兄が故國へ歸る時、持つて来て下さる筈のお金でしたが、兄が亡くなりましたので、富森さんが持つて来て、兄さんの遺言だからと言つて、明に下さつたのです。」

ですから明がお父さんに上げ度いと言へば、誰も故障を言ふ人は一人もありません。」

「さうした尊いお金を出して、私の苦衷を救つて呉れるのは嬉しいが、兄さんの二十一年餘りの、外國に於ける血涙の結晶と思へば、私には勿體なくて、お借り出来ないよ。」

「何故ですか お父さん。」

「私は僅か八千圓の金で、兄さんを南米へ追ふ様な不始末な事をして終つた。」



その兄さんの尊い汗と膏の結晶を、借受けて藤村家の破産を救つて貰ふなんて事は、到底出来ない事だ。

私はお前達の志には感謝するが、このお金を借受ける事だけは遠慮し度いのだ。悪く思はないで呉れ。」

## 妻子の願ひ

「まあ貴方、何を仰有いますの？」

貴方の御厚意は、兄だつて死んでも忘れないと言つてゐました。

南米へ行つてからも、貴方には最後の日迄感謝してゐたでございませう。

兄はあゝした性質ですから、藤村家の榮える事と、貴方の幸福をどんなに願つてゐたでせう。

その藤村家が滅亡に直面し、貴方が地位名譽財産と共に、總ての幸福を失はうとなさるのが、このお金で救はれたとしたならば、兄さんの御霊はどんなに喜ぶでせう。第一貴方、秀子さんの遺言にもある様に、明が折角楽しんで参りましたのに、その日に懐しいお父様の家屋敷がなくなつたとしたら、どんな心持がすると思ひになりますの？

貴方のためばかりではありません。明のために私のために、このお金をお使ひ下さい。」

その言葉を聞くと、敏郎は急に眼を輝かして

「智恵子、お前も明もこの家へ歸つて呉れるか。」

「昔はいざ知らず、今日は立場が違ひます。貴方さへ今迄の我儘をお許し下さつて歸れど仰有つて下されば、喜んで今日からこの家へ歸らせて頂きます。」

それだつたら明もどんなに喜ぶ事でございますか。」

「本當か 智恵子、今迄夫らしく、父らしい責任も務めも果さなかつた私を、そして



今當に先祖傳來の財産を殘らず人手に渡さうと決心してゐる私を見捨てずに、お前達はこの家を邸を救ひ、私の名譽地位命を救つて呉れようといふのか。」

「まあ貴方、こんな偶然な事で、藤村家が滅亡せずに、貴方の地位名譽がそのまま保存されたら、これに越した喜びはないではございませんか。」

窮窟な事をお考へにならないで、みんな神様のお恵みとお考へになれば、それでよろしいではございませんか。」

私だつてこんなお金が、明の手に入るなんて、夢にも思はなかつたのですけれど、それなのにこんなお金が與へられたのは、矢張貴方の所に、かういふ事情が用意されてゐたからでございますわ。」

「お父さん、お母さんの仰有る通りです。」

決して難しくお考へにならないで、藤村家をお父様の運命を救つて下さるために天が與へて下さつたと思つて、喜んでお使い下さい。」

御心配はありません。誰も一言半句もこれについて、文句を言ふ人はありません。」

亡くなつた伯父様もお祖母様も、この家のお祖母様も、みんな喜んで呉れます。」

そして私達親子も救はれるのです。」

そしてお父さん、餘分のお金を持つてゐたつて、何の役にも立ちません。」

藤村家に必要な財産なら買戻して下さい。」

全部お父様にお委せします。」

「でもこの金は、藤原家を再興するために兄さんが二十年餘り外國で苦心された資金じやないか。」

お前は藤原家を再興する義務があるんじゃないか。」

「お父さん、その御心配は御無用です。」

この家に弟か妹があつて、藤村家が立行くのでしたら、僕は勿論戸籍上藤原家を建てるのですが、藤村家に相續者のない今日では、私が藤村家を繼ぐのが當然でせう。」

「すると藤原家は誰が立てる事になるんだ。」

「お父さん、藤原家は、僕の子供が出来た時、その中の一人を藤原家に入籍して繼が



せればよいと思ひます。」

「さうか。智恵子それでいゝだらうか。」

「それはよい考へだと思ひます。」

世間には幾らでもある事でございます。

それに貴方お喜び下さいませ。明には最もふさはしいお嫁さんが決りかけてゐるんでございます。」

と宗方家と明との關係、照子の事等について、すつかり話しますと、敏郎は目を輝かして喜び、

「おゝさうか。そんなよいお嫁さん迄決りかけてゐるのか。」

それだつたら、お前達の意見に委せて、この家屋敷初め、必要なものは、全部元を買戻して、明の名義に直して、話がついたら、善は急げといふ例もあるから、宗方さんへお願ひして、そのお嬢さんをこの家へ貰つて祝言をすましてから、明達若夫婦は東京へ行つて大いに活躍するといふ。」

「お父さんやお母さんは、東京へ行きませんか。」

僕は永い間御心配かけましたから、これから一生懸命お傍で、朝夕孝行しようと思つてゐるのです。」

「お前の心持はよく分つてゐる。」

私はお前に孝行して貰ふ様な資格はないが、智恵子には充分資格があるから、お母さんにだけ孝行して上げてお呉れ。」

「貴方、そんな事を仰有るものではありませんわ。」

何方も親ではありませんか。離れてゐたつて傍にゐたつて、明を思ふ心に變りはありません。」

明だつて貴方と私に對する、子としての思ひに、甲乙などつけては居りません。」

「本當です。お父さん、今後そんな淋しい事を仰有らないで下さい。」

「お前がさう言つて呉れると、私も非常に心強く、嬉しく思ひます。」

ではかういふ事にしよう。私と智恵子は、住み馴れたこの家にて、平和に餘生を



送つて、時々東京へ出て行つて、お前達の厄介にもならう。

お前も自分の家だから、隙があつたら、家内や子供を伴れて、私達を喜ばせに来てお呉れ。」

「仰有る迄ありません。」

智恵子は喜んで、

「旦那様さういふ風に話が決つたら、早くうちの解決をおつけになつて、それから明の嫁のお話を進めて下さいませ。」

明、お前もお父様にお手傳ひして、出来る事だけはおやりなさい。

私は家の事をしますからね。

旦那様、又今日から私の炊いた御飯を差上げますよ。」

敏郎は喜んで、

「こんな事になるなんて、夢じやないだらうか。」

明は笑つて、

「お父さん、夢だつていゝではありませんか。」

最後迄覺めない様な、楽しい温い幸福な夢なら……。」

「本當にさうですわ。浮世は夢です。私共三人にこんな楽しい春が甦つて来るなんて、それこそ夢にも思ひませんでした。」

と智恵子は嬉し涙をこぼしました。

それから敏郎は明と智恵子を伴つて、奥の間へ行くと、神棚や佛壇にお燈明を上げて、感謝の禮拜を致しました。

## 廻る春

かくして家の決りがついて、藤村家の基礎は磐石の様に定まりましたので、敏郎は町  
の然るべき有力者を頼んで、自分と一緒に宗方家へ行つて、照子を貰ひ受けて、俄か



に親戚に披露して、目出度い華燭の典を擧げました。

親戚や世間の人は、驚きの目を睜りましたが、世間一般では、いよいよ藤村家も、秀子と好美のために、全財産を蕩盡され、滅亡の運命に瀕し、今迄代々この町唯一の素封家として、權勢を張つて來た、運命も風前の燈火と見て、敏郎が信用地位のある人格者だけに、惜しまぬ人はありませんでした。

それが突然降つて湧いた様に、二十五年目に智恵子が歸つたのみか、明といふ堂々たる相續者迄現はれたのですから、驚くのも無理はありません。

聽てこの事情が世間に知れた時、敏郎の運の強さを讃へると共に、智恵子の世に優れたる賢母の力と、明の天才的人格を讃へぬ者はありません。

「今度のお嫁さんの美しく、世にも稀な聰明な人である事は、矢張り智恵子さんが永い間、純真な真心の種を持つて、培つておいたために、今その徳が稔つたのです。」と言つて、智恵子を尊敬し、花嫁照子を賞め讃へない人はありませんでした。

かくて若き日は、義理人情といふ、無情な嵐に引き分けられて、二十年餘りお互に

深く信じ乍ら愛し乍ら、見る事もなく語る事もなく、夢に心を通はせてゐた敏郎夫妻は、遂に今日楽しい家に起居して、微笑み合つて、昔を夢の語り草として、幸福に、久遠の愛の曲を朝夕奏でるのでした。

## 久遠の愛 (終り)



## 筆を擱くに當りて

筆を擱くに當りまして、謹んで一言申上ります。

本書を著述致しました目的は、巻頭の序文にて述べました通り、我が日本の國には、神代ながらに傳りました、世界無比にして、純眞無缺な、國民精神及び、明らかな婦道が傳つて居ります。

この婦徳があるために、日本の國は、萬古不變の御稜威が燦然として、輝いてゐるのでございます。

然るに最近文化開け、世界各國と廣く交るにつれて、日本に生れた國民殊に婦女子が、外國を知ると知らざるを問はず、濫りに歐米思想風俗を禮讚して、誤れるその風俗を眞似、價も知れぬ程尊い、日本婦人としての特性を失ひ、思想も言語も行動も、

浮華輕佻に流れ、ために敬神崇祖、忠君愛國、義勇奉公といふ、尊い觀念を忘れて、自己天來の使命を果さず、ために家庭社會の圓滿を缺き、婦道にもとる如き行を現はす者が、月と共に増加して參りました。

かくては將來の國家の運命に、重大な影響を及ぼす事を憂へますために、誤れる歐米模倣禮讚思想を改めて、總ての女性が純眞にして、固く深く大きな慈悲慈愛を以て、親に仕へ、夫に仕へ、最も優良なる子女を生み育て、神と君の御寶として、直接間接に天壤無窮の皇運を扶翼し奉り、世界人類の、眞の平和と幸福の指導者として、ふさはしき國民たらん事を念願する餘り、當に時は建國以來、未曾有の非常時に直面し、一層この必要を痛感致しましたために、一心に祈願をこめまして、天つ神國つ神の御神護を受け、本書を編輯致しました次第でございます。

ために文章字句の表現は、甚だ拙いものでございますが、古代傳統的に我が國に傳りました大和魂の力は、如何にしてその子孫に傳はるものか、又人間の眞の幸福は、何處に秘んでゐるかといふ點について、出来るだけ懇ろに説明を加へました次第でござ



ございますから、本書を單なる家庭小説人情小説として、お読み捨なく、再讀三讀下さ  
 いまして、著者が渾身の力をこめて、本書に祈り込めました、國體の精華の眞理を充  
 分味つて頂きます事を、特にお願ひ申上ます。  
 終りに臨みまして、本書愛讀者會員の不滅の御幸福を、謹んでお祈り申上ます。

昭和十三年正月

著者記す

### 忠誠婦徳會發行の書籍

日本婦人の使命と	其の修養(賣切)	片桐龍子著	定價金貳圓 (郵稅拾貳錢)
宗教小説	天界地界前編(賣切)	片桐龍子著	定價金貳圓 (郵稅拾貳錢)
宗教小説	天界地界後編(賣切)	片桐龍子著	定價金貳圓 (郵稅拾貳錢)
理想小説	眞珠の塔(賣切)	片桐龍子著	定價金貳圓 (郵稅拾貳錢)
事實談	烈女の鑑(賣切)	中田武雄著	定價金壹圓 (郵稅拾錢)
教育小説	輝く道(賣切)	片桐龍子著	定價金貳圓 (郵稅拾貳錢)
理想小説	心の華(賣切)	片桐龍子著	定價金貳圓 (郵稅拾貳錢)



皇軍慰問日記	國境を越えて(賣切)	片桐龍子著	定價金貳圓 (郵稅拾貳錢)
家庭小説	姫かゝみ(賣切)	片桐龍子著	定價金貳圓 (郵稅拾貳錢)
國華寶典	心身健康秘録	皇華聖道會編	定價金參圓 (郵稅拾貳錢)
國華神道	萬壽華	片桐龍子著	定價金貳圓 (郵稅拾貳錢)
信仰小説	微笑	片桐龍子著	定價金貳圓 (郵稅拾貳錢)
教育小説	黎明ヶ丘	片桐龍子著	定價金貳圓 (郵稅拾貳錢)
皇華聖道寶	壽	片桐龍子著	定價金貳圓 (郵稅拾貳錢)
聖訓	眞生命の光	片桐龍子著	定價金貳圓 (郵稅拾貳錢)

昭和十三年四月二十日印刷  
昭和十三年四月二十五日發行

不許  
複製

發行所

定價金貳圓

郵稅拾貳錢

著者 片桐龍子

發行所 岐阜市田生越町 片桐龍子

印刷者 岐阜市七軒町十二番地 河田貞次郎

印刷所 岐阜市七軒町十一番地 西濃印刷株式會社

岐阜支店

岐阜市田生越町

忠誠婦徳會

電話二三四五番  
振替口座名古屋一六三九〇番



終